

C E L

Culture,
Energy
&
Life

vol.
114

November 2016



特集

外から「日本」を
見直す

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside

Special Feature

Reframing Japan from the Outside



「東と西の結婚」を理想に
芸術活動を続けた
陶芸家バーナードリーチの
「楽焼鬼文皿」。
所蔵／日本民藝館

特集 外から「日本」を見直す

日本を訪れる外国人観光客が急増している。彼らは単に日本の観光地を訪れるだけでなく、日本の文化や食、暮らしといった日本的なものに興味を持ち、新しい視点で日本を評価しはじめている。しかし、これは今に始まったことではない。「日本」はこれまでずっと、外からの視点に触発されることで自らを見直し、新しいものを生み出し続けてきたのではないだろうか。今号では、過去および現在の外からの視点をとおして「日本」を見直し、これからの日本の姿を展望したい。



Column & Essay

衣食住遊	きものの力、恐るべし	深井 晃子	46
くらしのこよみ	二十四節気七十二候の句を味わう 第二回 銀杏	うつくしいくらしかた研究所	

CEL Insight

CEL Output Part 1	生活者の視点から考えるスマートコミュニティ	加賀城 俊正	48
CEL Output Part 2	高齢者の社会参加と健康長寿の関連性について	遠座 俊明	52
CELからのメッセージ	混じり合うということ	池永 寛明	56

Cover Photo by Kuribayashi Shigeki

外からの視点に日本人が今学ぶべきこと

Alex Kerr

アレックス・カー 東洋文化研究者、作家

聞き手
池永 寛明 大阪ガス株式会社
エネルギー・文化研究所長
Ikenaga Hiroaki

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside

Part

①



〔 総 論 〕

訪日観光客の急増が叫ばれる現在よりもずっと以前から、実に多くの外国人が日本を訪れており、彼らに触発され、その文化を取り入れることで、日本文化もまた発展をしてきた。日本に40年以上在住し日本文化を研究しながら古民家再生に尽力するアレックス・カー氏は、母国アメリカだけでなくヨーロッパやアジア諸国のまちづくりや文化にも造詣が深い。カー氏ならではの幅広い外の視点から我々日本人が「今学ぶべきこと」について考える。

撮影／須田 俊哉

美しき良き日本 ―幼き日に見た「家」への想い

池永 アレックス・カーさんは徳島・祖谷^いでの古民家再生プロジェクトをはじめ、景観保存活動や講演、あるいは文化的なイベントのプロデュースなど幅広く活躍されています。『美しき日本の残像』『犬と鬼』などのご著書には、幅広い日本の文化的な知識や社会背景、それに根ざした深い提言などが書かれていて、改めて私たち日本人が気づかされた点が少なくないように思います。

現在、日本に興味をもってくださる外国の方々は多いのですが、「クールジャパン」のようなある種限られたイメージで捉えている方もいれば、もう少し本質的なところまで理解しようとする方もいて、二極化の現象がみられるような気がしています。今日は、カーさんご自身の体験を通して感じられている、過去・現在・未来の日本のあり方などについてご意見やご提案などを伺います。

まず、最初に古民家再生をされた徳島・祖谷に至るまでの道のりを伺えますでしょうか。

カー 私は1964年、ちょうど東京オリンピックの年に、父親の仕事の都合で来日しました。12歳のときですが、横浜にあったアメリカ海軍の基地に住むようになります。そのとき大変印象に残ったのが「家」だったのです。日本の夫人たちとの交友会のようなものに母が参加しており、毎月誰かの家を訪れるのですが、一緒に連れて行ってもらっていました。当時、三浦半島の三崎には、ある外国人がつくった別荘街みたいなものもあったんですが、日本の古民家の中を50年代に本国アメリカで流行ったランチハウススタイルに改造していて、そのウッディな雰囲気がとても気持ち良かったです。決して贅沢ではないけれど、トイレなどの設備をきちんと調べて居心地のいい空間にしてみました。

ですから、すでにその時代から外国人が古民家を新しくリノベートするという発想はあったわけです。

池永 その後は、本国と行き来されながら、1971年に祖谷と出会われたようですが、廃屋となっていた古民家をご自身の手で「庵^{ちい}庵」という形にまで完成させようと思われたのは、やはりその子どもの頃の体験があったからなんでしょうか。

カー そうですね。当時は学生でお金もなく、すべてハンドメイドでリノベーションを始めたんです。腐った部分を直し、茅葺き屋根を葺き替え、トイレをつくり、照明を入れて……さっと手を入れて終わりというのではなく、40年以上ずっと続けていたんですね。ようやく完成したのは3年前です。

池永 日本の1980年代はバブル経済で、古いものをどんどん壊し、新しい建物を次々と建てていた時代です。

カー 今もそうですけどね。古民家の取り壊しは、バブルのときより今のほうがはるかに多い。

1970年代は、まだ「美しき良き日本」がぎりぎり残っていた時代で、そのなかで祖谷を見つけました。80年代から変わるスピードが速まり、90年代は急ピッチで、2000年代になってさらに加速してしまいました。

偏った日本論 ―「世界」に囚われた日本人

池永 祖谷を探す以前にはイェール大学で日本学を学ばれ、『甘え』の構造』などたくさんさんの日本論を読まれたそうですが、その後の日本での実体験との違いのようなものを感じたことはありませんか。

カー あの頃の日本論は日本の学者が一種のプロパガンダとして書いているものが多くて、日本の優越性を訴えるようなものが流行っていました。ですが、私はそれにはちょっと納得できませんでした。

当時、中国美術の専門家で伝説的なアートディーラーだったデイヴィド・キッドという人に日本のことを含めていろいろなことを教わったのですが、「あんな単純な日本人論は大外れだ」と。中国文化があつての日本、東南アジアがあつての日本、韓国があつての日本。もつとアジアを取り入れなければいけないという思いがありましたから、その頃の日本論に対しては、違和感ばかりでしたね。

池永 ご著書にも、その論調を日本人自身が受け入れがちだということも書かれていますね。

カー 「日本は世界」のような評価に囚われてしまつて、本当はどこがいいのかが見えなくなるんですね。皆さんが凄いと思っていない部分が本当は素晴らしいということがあるんですよ。

池永 具体的にはどのようなことでしょうか。

カー 9月に京都についての本(『もうひとつの京都』)を出したばかりなんですが、

るので、どこまで変えるべきかは毎回熱い議論になります。

そもそも昔のままの民家を再生するだけでは、現代の私たちが生活するうえで無理があります。たとえば世界の常識としてあるのが、古い家の直しを今の時代に引き上げること。残念ながら今の日本は資料館として直すというレベルで留まつていて、江戸がこうだった、明治がこうだったというような学芸員的な発想しかありません。だからコンセントひとつ変えられないとか、昔の窓がこうだったから変えられないとか言う。でも、ヨーロッパは家を大事にしながら、完全に今の設備に転換させます。これが私の仕事の背景にありますね。

池永 学芸員の発想で保存して昔のままで残そうとするところが多いなかで、カーさんはアップデートする形で再生させる。

カー 昔の家に生活しながら今の生活にあつた快適な空間にできるということが知られていない。それでつい壊してしまうんですね。本当にもつたいないです。

池永 古民家には床暖房やペアガラスまで調えられているそうですね。

カー 最新の技術も取り入れた家なんですね。古い家イコルテクノロジーがない、原始的で自然にかえるということではありません。

池永 大阪ガスでは、22年前に「NEXT21」という実験住宅を建てたのですが、最先端の建物に江戸時代の住まい方の考え方を取り込んでいます。逆に新しいものに古い昔の知恵を入れるという発想はいかがお考えですか。

カー 確かに江戸の知恵というのはあるんです。そういうものを捨てるのではなく上手く取り入れながら、最先端の技術も取り入れて、今の時代に生きている家にもっていききたいですよ。

時代遅れの日本の都市計画 ―大切な自国へのプライド



Alex Kerr

池永 カーさんのオフィスには自治体からたくさんさんのオフアークがくると思いますが、カーさんは今の地方をどのようにご覧になっているのでしょうか。

カー だいたいどの地方へ行っても駄目ですね。皆さんが考えている以上の危機的な状況です。ど



Ikenaga Hiroaki

特に茶の湯は、「序破急」というリズムを決めて、そのなかに独自の世界をつくりますが、これは世界のどこでもできなかったことです。

古民家再生 ―「学芸員の発想」を超えて

池永 確かにあいまいばかりではありませんね。ところで、簾庵ですが、古民家は内部の修理が必要だとしても、建物のつくり自体はそのまま使える状態であることが多いのですよね。

カー そうなんです。日本の古い家屋は壁らしい壁がない。全部が建具で、障子などで空間を変化させたりできる。それも凄いい知恵ですが、木造建築ならではのつくりだと思えます。それから大黒柱はできるだけ動かさない。柱は部屋の真ん中にそのままぽんとあつても綺麗なんです。味がある。ですから、古い家の基本的な空間感覚や、構造や木材などの材質はできるだけ大事にしたいし、尊重したい。古民家の魅力はそういうものにあると思います。一方で、快適さやプライバシーの問題、あるいは耐震や建築基準法などいろいろあ

んどん人が減り家も空き家になり、悲惨です。特に周りの自然を粗末に扱ったり、古い町をつぶしたりしたところは、もう手がつけられない。ですが、まだ綺麗な自然が残っていたり、空き家でも昔の家が残ったりしていれば、望みがあります。今は観光の時代なので、それが最後の救いの手になるんですね。たとえ僻地でも、きちっと受け皿をつくと人が来てくれる時代になったので、それに気づいた行政や政治家が相談に訪れます。私たちのほうからプレゼンしたことはありません。

池永 そうなんです。

カー 結局、外部の人間が言っても駄目なんです。地元の思いがあつてこそで、そういう、本当にやりたいという思いのないところで成功したケースを見たことはありません。

池永 地方創生の目的で国からの補助金を入れても難しいでしょうか。

カー お金があつても、どのようにすればいいのかというイメージがないですかね。

池永 自分たちの町や地域の真の良さ・強みがわかっていないのでしょうか。

カー そう、プライドがない。それが一番のネックで、自分たちの町を素晴らしいと思っていないのです。壊して新しい建物をつくれれば、それが現代的でいいと思う人が、残念ながらいまだに多い。

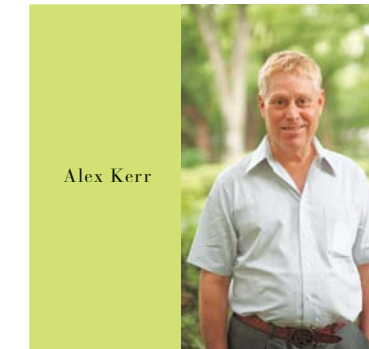
池永 古いものをすぐに壊して新しいものにしてしまう。日本がこうなってしまうのはなぜだと思いますか。

カー そもそも、ビルを建てるとか、道路を通すというのは発展途上国的な発想なんです。それはどの国にもあつた。アメリカもそうなんです。たとえばニューヨークの有名なペン・ステーションの駅舎。もう泣きたいくらい美しかったのに、60年代に壊してしまつて、殺風景なつまらないビルにしちゃったんですね。さらに70年代にランドセントラル駅も壊そうという話になりますが、猛烈な反対運動が起こり、それ以降は歴史的に価値のある建物は壊してはいけないという共通認識が生まれたんです。



簾 庵
ちいおり

カー氏が徳島・祖谷の古民家をリノベートした簾庵。



Alex Kerr

アレックス・カー

1952年米国生まれ。東洋文化研究者、作家。イエール大学日本学部卒業。1977年から京都府亀岡市に居を構え、書や古典演劇、古美術など日本文化の研究に励む。その後、景観と古民家再生のコンサルティングを開始し、長崎県小値賀町、奈良県十津川村など十数軒の古民家を改修。滞在型観光事業を営む。近著に『もうひとつの京都』（世界文化社）がある。

つまり、「車が欲しい」「冷蔵庫が欲しい」というような時代がこの国でもあ
るけれど、ある程度社会が豊かになると卒業しちゃうものなんです。そこで、「昔
の良さや自然はやっぱり大事だ」「新しいものをつくりながら古いものと調和さ
せよう」という思いに切り替えができるようになる。ところが先進国のなかで唯
一それができなかったのが日本です。卒業せずに留年のままみたいなことで、そ
こが問題なんです。経済が進んだ国で、これほど勝手に古い町や自然を壊してい
るのは珍しい。世界の動きから完全に逸脱しています。

池永 日本の都市計画は海外に比べてどうでしょうか。

カー 古臭い。私からみれば、時代遅れです。

池永 カーさんは、日本の都市は競争相手を想定していないとも言われています
ね。都市・地方として国内だけでなく世界が競争相手のはずなのに、ベンチマー
クする相手を間違っている。

カー 東京から祖谷に行こうとすれば、お金や時間の面では、バリでも、バンコ
クでも行けるんです。ですから、そういうところが競争相手だと思っています。

池永 まったく同感です。私も大阪ガスの供給エリアである近畿には、文化コ
ンテンツはものすごく多い。ところが、行政のトップに「どの都市が競争相手だ
と思って都市経営されていますか？」と伺っても、これまでそういうマーケティ
ングはされていなかった。

カー 確かに近畿の文化財は凄いですね。

池永 たとえば奈良は、中国語でナーリヤン (Nal. liang) と呼ばれますが、「す
べてが良いところ」という意味もあるそうで、もつと評価されていると思います。
カー 奈良は、「大仏商法」という言葉があったぐらいですから、より魅力的に
しようという思いは近畿のなかで一番薄かったかもしれないですね。

京都はずっと駄目だったけれど、最近は景観に力を入れるようになり、2年前
に屋上看板を全部撤去しました。看板をなくすと経済に悪影響を及ぼすと心配す
る声もありましたが、実際のところ、撤去後に影響があったかといえば、ゼロで
すね。かえって街の環境、美観においてはメリットになった。

池永 大阪も、近代建築物を「生きた建築ミュージアム」だと捉える動きが出て
きたりと、新しいものと古いものが混じり合うまちのリノベーションが動き始め
ています。

カー 大阪はもつと売り出せばいいいつも思っています。私は通天閣のある新
世界のあたりが好きです。近代的なものとして、非常に面白い。昔のダウンタウ

歌舞伎の世界では「間」はとても大切な問題ですから。

池永 そこから生活文化そのものも歴史も学べるんですね。歌舞伎はまさに日本
の生活文化の宝庫みたいなものですね。

カー 玉三郎さんは、古いものを非常に大事にしています。そしてその深いこ
ろを追究していきながら、非常に現代的な目で見ていますね。昔のしきたりがこ
うだったということは一切言わない。そういうものを大事にするのではなく、「し
きたりや型の裏に何があったか」ということをいつでも考えている方です。よく
私たちにも指導してくれましたが、踊りで東山といったら東山を見ていなければ
いけないですね。型で示す東山じゃなくて、山そのものを見なさいと。

池永 やはり深く追究すればするほど、表面的なことではなく「実」のところに
行きつくんでしょね。

カー そして面白いことに、古いものの奥にたどり着いた時点で斬新さを見つけ
るわけですね。

池永 伝統を追究すると新しいところに行きつく。

カー そう。だからしきたりや何かに囚われている人たちは新しさもない。

池永 表面的な物質的デザインではなくて、その奥にある精神的にデザインされ
たものを、カーさんが発掘してくれているのではないかと思います。カーさんが
古民家でやられていることも同じですよ。白洲正子さんの武相荘ぶさそうもまさに古民
家ですが、そのような影響もありますか。

カー 子どもの頃は古い家を近代的に直していたのは外国人が多かったですが、
でも白洲さんみたいな方も昔からいましたので、そういう本心に美しいものを知
った日本人はやっぱりいたんですね。

池永 ですから我々はそういう人たちからも学んでいかなければ、本当の日本の
良さは見えてこないし、日本のあるべき姿も見えないままになってしまう。

カー そう思いますね。

古来あった外の視点 ――今こそ取り入れ、古い考えから卒業を

池永 カーさんは東洋文化研究者の顔ももっていらして、最近では東南アジアにも
よく行かれてるそうですね。著書には歌舞伎の『累かさね』になぞらえて、移転を
考えながらも結局日本に戻ってきてしまうと書かれています。

カー 日本から離れて東南アジア、特にタイのあたりをまわっていると、そこか



Ikenaga Hiroaki

池永 寛明

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所長。1982年入社後、天然ガス転換部にて人事勤労業務、営業部門にてマーケティング業務に携わる。日本ガス協会企画部長、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。

ンの良さがあります。

池永 一方で江戸の頃の風情も残っています。ですが、近畿がこれからどうい
うふうに生き延びるかという議論をするなかで、強みである歴史・文化を核とした
都市魅力戦略の議論にはなかなかならない。

カー とはいえ、大阪は今観光客が増えています。ですから観光産業というのは
成長産業になりつつあるとは思っています。

日本文化を知る日本人との出会い ――「型」に囚われず「実」を学ぶ

池永 最近、滋賀県の琵琶湖を訪れる外国人観光客が増えています。湖西は、カ
ーさんとお付き合いがあった司馬遼太郎さんが『街道をゆく』のなかで、日本人
の祖形を求めて最初に選んだ地ですが、司馬さんとの話で特に印象に残ったこと
はあります。

カー 司馬さんが大阪についてしてくれた話が面白かったですね。彼いわく、昔
は運河が多かったので橋がたくさんあったが、役所がつくったものは少なくて、
大半の橋は町民が自分たちでつくりあげたものだ。江戸時代頃の話ですが、京
都も江戸もすっかり取り締まりがあるのに大坂だけノーマンズランドで、結構好
き勝手にやっていた。そこから大阪人の自由な発想が生まれて、独特な大阪弁や
大阪漫才、それから商売につながっている。下手な規制がなくなってきた人たち
だからいきいきとした大阪文化が生まれた。そんな話をしてくれました。

池永 ほかにも坂東玉三郎さんや白洲正子さんといった錚々たる文化人の方とも
大変親しくお付き合いされていたそうですが、お二方からはいかがですか。

カー 玉三郎さんとは凄く若い頃に知り合っています。彼の通訳をしていたこと
もあったので、一日中薬屋にいることもあり、そばにいただけで多くのことを学
べました。たとえばしぐさやセリフの話し方、言葉を話すときの「間」もそうです。

ら日本が見えてくる部分があるんですね。お寺などは中国や韓国ルートで入って
きていますが、家はあきらかに東南アジアから入ってきています。タイ、インド
ネシアにある高床式で全部木造の東屋のようなものや草屋根もそうです。もちろ
ん日本だけのものもありますが、日本の礼儀作法も、タイと随分通ずるものがあ
るんですね。

池永 奈良時代の貴族などの支配者層は40%ぐらいが渡来人だったようですが、
平安時代の初期頃まで、渡来人の知識・知恵を活かしながらやっていたという歴
史があります。

カー あの頃は凄くインターナショナルでしたね。仏教にしても、日本の仏教か
らインドネシアのボロブドゥールまで全部ひとつでした。

池永 海外の技術・文化が僧侶や渡来人を通じてもたらされ、そこから日本的な
ものをどんどん生み出していきました。

カー 変えていくわけです。

池永 そこが日本の良さにつながっている。結局日本人は古くから外の良いこと
に学び、吸収して、それを良い形で日本の文化として進化させてきたという史実
があるわけですから、現代の我々もそれに学ばなければいけませんね。

カー やはり「型」にこだわるのではなく本心に大事な「実」を見極めてほしい。
先にも述べたとおり、残念ながら日本はずっと留年が続いていますが、卒業でき
て初めて古い町の活かし方が考えられますし、成功すれば、新しい町にも良い発
想が生まれる。高層ビルや地下鉄のつくり方といった新しいものにも転換できる
でしょう。それらはすべてつながっていると思います。日本は資金力や経済力も
ある、教養もある。そういうものを支える、活性化させる知恵も、力もあるので
すから、何百年何千年積み重ねてきた風景、あるいはコミュニティが壊れてしま
う前に、なんとかしっかりと卒業してもらいたいですね。



特集／外から「日本」を見直す／その2

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside

Part



「事例」

取材・執筆／脇坂敦史 撮影／栗林成城

奥深いからこそ革新的なアプローチもできる能

日本の伝統芸能のなかで、特に「能」を語る日本人が果たしてどれくらいいるだろうか。「世界最古」の古典演劇といわれる能には、実は奥深さだけでなく革新的な要素も多く存在している。そこで40年以上能を勉強し、仕舞教士として指導を行うほか、英語で能を演じる演劇集団「シアター能楽」を立ち上げるなど、能を深く知るリチャード・エマート氏に、その歴史的な奥深さだけではない現代の能のあり方、英語能という画期的な試みなどについて伺った。



エマート氏が手がける新作英語能「ブルームーン」。
オーバー・テンフェイスにて、シテ方がつけるプレスリーの面と黒人の面(右上写真)。

リチャード・エマート

Richard Emmert



言葉ではなく、
まず身体でぶつかった
能との出会い

歌舞伎は観るけど能はちょっと……そんな日本人は少なくない。日本文化を代表し、その奥深さを象徴する芸能であることはわかる。しかし、能の魅力を説明しようとしてもうまく言葉にはできない。そして、ろくに何も知ら

ないことに気づくのではないだろうか。

「歌舞伎と能の違いは、小説(散文)と詩(韻文)の違いと少し似ているかもしれないですね。小説の方がとつきやすいし、読む人も圧倒的に多い。今、詩集を読む人は少ないけれど、詩でなければ伝えられない、深い世界やニュアンスもあるでしょう」。そう語るリチャード・エマートさんは、アメリカのオハイオ州生まれ。日本で40年以上にもわたり能の仕舞や謡、囃子を学び、

あらゆる側面から能を実践してきた、希有な人物だ。現在は、日本の大学で

能を中心に日本とアジアの伝統芸能を教えながら、「シアター能楽」という演劇集団を率い、英語能の制作と上演も行っている。

「能を習っている、能を勉強していると日本人に話すと、よく驚かれました。あなたに能がわかりますか?という反応です。たぶん、それは能のストーリーや謡(台詞や歌)が言葉として理解

できますか?という意味なのでしょう。

けれども、能はただの台詞劇ではありません。たとえばオペラがそうであるように、音楽や所作、衣装など、感動したり理解したりする方法はひとつではないのです」

言葉よりも先に、まずは身体表現や音楽表現としての能の世界に飛び込んでいった。初めて「能を演じた」のは、初来日より前の1970年。早稲田大学とも提携していたインディアナ州の

リチャード・エマート／1949年アメリカ生まれ。武蔵野大学文学部教授、喜多流仕舞教士、「シアター能楽」芸術監督。アラム大学在学時に早稲田大学国際部に留学。さらに東京藝術大学で日本とアジアの伝統芸能の研究も行う。英語能の作曲、演出を数多く手がけ、1990年にはCD『英語能』も発売。現在は国内外で能のワークショップや公演など幅広く活躍する。

アーラム大学で受けた能のゼミで、英語能『聖フランシス』のシテ方（主人公）に抜擢されたのだという。

「振付はアメリカでも有名なモダンダンスアー。フルートによる笛の音もよく研究されたもので、能らしさを出そうと工夫していました。しかし今、振り返ると、あれが厳密に能と呼べるのかどうかはわかりません。私自身もその後、これほど能にのめり込むとは思っていませんでした」

2度目の来日を果たした1973年の秋、自身の演じた『聖フランシス』の記録映画を東京で観る機会があったという。そのとき、狂言方と泉流の能楽師である野村万作氏のもとで稽古していたダン・ケニー氏から、東京で『聖フランシス』をやりたいと協力を求められたそう。

「やるなら、もっと能をきちんと習いたい！ 咄嗟にそう思ったのです。それから喜多流の松井彬先生のもとで謡と仕舞を習いはじめ、2年目からは笛や鼓も、それぞれの先生について習いはじめました」

能の世界を言葉として理解するより先に、まずは稽古に打ち込んだ。「稽古が始まると、自分がやっていることに集中してしまうものです。どうすればすり足がきれいにできるか。どう体を動かすか。発声はどうするか。打楽器のリズムや掛け声のタイミングはどうするか……」。静かな、ゆった

りとした動きのなかにも大きなエネルギーを込めていく。そうした能の魅力に惹かれていった。しかし、日本の稽古事ならではの教え方や独特の流儀といったものに、違和感はなかったのだろうか。

「最初の頃、私とまったく目を合わせない先生もいて、ああ、外国人に慣れていないのかなあ、と思ったことはありません。でも後で気がついたのは、その先生はどんな生徒とも目を合わせないということでした（笑）。それぞれの先生の違いを個性として感じつつも、日本文化にはこういう特徴がある、といった大上段の解釈をあまりしないのが、いかにもエマートさんらしい。

自分のなかにある 生きた言葉で 能をつくりたい

能の稽古と並行して、さまざまな研究にも取り組んだ。なかでも、能の音楽的な側面に興味があったという。そして当然のことながら、ストーリーや歴史的な背景、言葉そのものへの理解も深まっていく。

一方でエマートさんは、英語で能を演じたいという気持ちも抱き続けてきた。

「80年代から英語能をいくつか手がけてきましたが、どうしても納得できない部分がありました。英語のできる歌



©David Surrasky

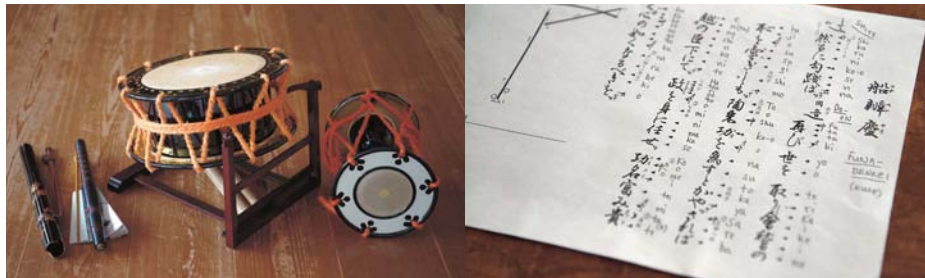
「ブルームーンオーバー・メンフィス」は、米国ロックミュージシャンのエルヴィス・プレスリーが題材の物語。命日に邸宅グレイスランドを訪れたある女性が、プレスリーの亡霊（精神）と遭遇。美しい瞑想の世界が展開される。

てきた。さまざまな人が新作能を試みる時代になったのです」

能を含めた日本の 伝統芸能には もつと可能性がある

能は現在まで継承されている古典演劇として「世界最古」ともいわれている。数百年にわたり、新しいものを生み出す力と古いものを守る努力が、常にせめぎ合ってきたにちがいない。エマートさんの取り組みを知れば知るほど、ふたつの力のバランスを考えずにはいられない。

「明治時代から、日本の音楽教育は西洋音楽一辺倒になってしまいました。私の学んだ東京藝術大学でも、西洋音楽と日本音楽の割合はだいたい9対1。小学校から高校までの音楽教育では、さらに比率が高いでしょう。能だけではなく、日本の伝統芸能にはもつと大



外国人に
教える場合、
日本の古典能では
台詞の読み方を
ローマ字で表記し、
新作英語能の場合は
特殊な三線譜の
仕様にするなどの
工夫がされている。
エマート氏は
能を
舞うだけでなく、
能管（笛）、小鼓、
大鼓、太鼓の
演奏も行う。

手を起用すると能でなくなってしまう、謡のできる人がやると英語がだめになってしまう。能でありながら、英語として生きてくるものにしたと思ったのです。そこで、少しずつ外国人にも能を教えるようになった。2000年には外国人と海外在住の日本人による「シアター能楽」を結成。以来、数々の古典や英語能の公演を精力的に行っている。能は、翻訳の難しい詩（韻文）

きなポテンシャルがあると思っています。日本の伝統音楽を習得した先生が増えて、この割合が半分かそれ以上になってもおかしくはない。2002年度から中学校の音楽の授業で和楽器を教えることが義務づけられたが、それでも、まったく足りないとも強調する。日本文化における基礎的な教養でもある伝統音楽の役割を、もつと見直すべきだというのだ。確かに能は、日本人にとっても「よくわからないもの」「難しいもの」かもしれない。それなら、なぜ学校で教えてくれないのだろうか。「かつて日本でも英語の先生が英語を読めても、話せない時代がありました。今は話せる先生が当たり前になってきている。それも変わってきていて、おそらく英語教育は良くなってきている。音楽教育も、もつと伝統音楽を取り入れて、少しずつ良くなればいいと思います」

伝統は、守るか変えるかの二者択一ではない。英語能のような試みに対して、どこかそういった目でジャッジしようとしているのではないか。

「2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決まってから、どうやって外国人に能を紹介するべきか、相談されることが増えました。でも日本人自身が、能を含めた日本の古典芸能一般に対してもつと興味をもたなければ、本当のものを伝えることはできないでしょう」

のようなもの。だからこそ、自らの内に流れる言葉を生かして新しいものをつくりたいという気持ちが湧いてくるのだろうか。

「自分のなかで最初に流れている言葉というのは、やはり英語なんです。だから、英語で能をつくるのが純粹に楽しい」とあくまでも率直だ。

とはいえ、エマートさんの考える「英語能」の定義はかなり厳密でもある。単に能の雰囲気をもった演劇というだけでは十分ではない。それが「能の技法や様式、舞、謡や囃子などによって構成された」ものでなければならぬ。「それでも、英語能という呼び名を嫌う人はいます。日本人のなかにも、外国人のなかにも、能は決して英語にならないと考える人がいるのです」

エマートさんが手がける英語能のテーマは、現代的で魅力的なものが多く。たとえば、トラウマを抱えたイラク戦争の帰還兵を描いた『Zahid Dates and Poppies（ナツメヤシとケシの花）』。あるいはミュージシャン、エルヴィス・プレスリーの孤独と心の闇を描いた『ブルー・ムーン・オーバー・メンフィス』など。

「能の特徴のひとつは、場所を描くということだと思います。私たちは今、自分がいるところを自分の空間だと思っている。けれども30年前は、どうだったか？そこは昔どんな場所で、誰がそこにいて、何が起きていたのか？



Richard Emmert

では、エマートさんは、自身の英語能の意義や未来をどのように見ているのだろうか。

「英語能は何らかの形で能を知ってもらうきっかけにはなるでしょうが、もしかししたら、ただ能の影響を受けた英語劇で終わってしまうのかもしれない。私自身はもうすぐ死んでしまうかもしれないから（笑）、それはわからない」。確かに新作能は、つくることよりも、演目を受け継いでいくことの方が、ずっと難しい。長い長い能の歴史のなかで、私たちが見届けられる時間など、まさに舞台上の「幻」でしかないのかもしれない。それでも、古典として磨かれ、「完成されたもの」と思っていた能が、再びダイナミックに新しいものを生み出す場面に立ち会うことはできる。私たち日本人は能だけでなく伝統文化を知り、その可能性を広げることにそろそろ目を向けるべきではないだろうか。

お酌で世界とつながる日本酒

未知なる

「日本語」に魅かれて

ハーバー氏の来日は、昭和63（1988）年。大学卒業後、一度は海外に住みたいと考えたのがきっかけだった。「実は、最初東ドイツの大学と日本のJETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）の二つを申し込んでいました。たまたま先に日本から返事が来たから行こうか、というくらいの気持ちでした」と、ハーバー氏はテノポのよい関西弁で語る。

当時在籍していたオックスフォード大学の先輩が一期生としてすでに日本に派遣されていたことがJETプログラムの応募の動機となった。また、英語以外に仏・西・独語にも触れた経験があったハーバー氏にとって、これまで学んだ言語と全く系統の違う日本語へ

無形文化遺産となった「和食」と最も相性のよいアルコールといえば、何といっても日本酒だ。しかし、ピーク時に170万klを超えていた日本酒の国内出荷量は、約3分の1にまで減少しているのが現状である。そのようななか、京都府京丹後市久美浜町にある木下酒造は、この10年で生産量を3倍に伸ばし、世界各国へ出荷するなど、勢いのある蔵元のひとつだ。酒造の立役者で杜氏^{とうじ}を務めるイギリス人のフィリップ・ハーバー氏に、日本酒造りに携わった経緯、それらを通して見た日本と世界とのつながり方について、お話を伺った。

の関心も高く「新しい言葉を勉強できる」と思ったという。

期待と好奇心を胸に、日本語は全く話せない、日本という国の知識も「時代劇のイメージ」、日本酒は「日本特有の製法で造る、『SAKE』というアルコールがあるという知識だけ」という、全てが真っ白な状態で来日したのである。

来日当初は大阪の公立高校で教える

フィリップハーバー

がら、学校外で公文に通い、日本語を勉強した。日本語、特に大阪では「ぼちぼち」といった擬音・擬態語が多く使われるのが面白いと感じ、敬語の難しさにぶつかることもあった。それらを「どの国の言葉を学ぶときも必ずぶつかると壁のようなものはあります。新しい言語を学ぶにあたっては、それも含めて全てが楽しいプロセスです」と笑顔で語る。困難も楽しみにかえる姿

Philip Harper

フィリップハーバー／1966年イギリス生まれ。オックスフォード大学卒業。88年に来日後、奈良の梅乃宿酒造に入り、2001年に南部杜氏資格選考試験に合格。大阪の大門酒造を経て木下酒造に杜氏として迎えられ、初年度に全国新酒鑑評会で金賞を受賞。新定番となった玉川の「自然仕込」や江戸時代の製法で造った「タイムマシーン」など、挑戦的な酒造りで新たなファンを生み出している。

取材・執筆／加藤しのぶ 撮影／宮村政徳



Kinoshita Shuzo

上／天保13年創業の木下酒造。軒先には酒の神様に感謝を捧げる杉玉がつり下げられている。左／穏やかな波が広がる久美浜湾。日本海と砂州で隔てられた潟湖（せきこ）で、カキの養殖でも知られる。

右／古い酒樽を再利用した商品展示台。中／1本1本、丁寧にラベルを手貼りする。左／仄暗い酒蔵内。扉の奥は仕込蔵。



勢で日本語を学んだハーバー氏は日本の文化とも積極的に関わっていくことになる。

日本の伝統産業を支えたい

ハーバー氏は最初に語学学校ではなく、公立の学校に赴任したこともよかったと話す。

「語学学校は外国人講師のサポートに力を入れますが、その分、生の日本の姿に触れる機会は少なくなる。公立の学校で働くことで一般的な日本人の暮らしにじかに触れることができました」

そのひとつが職場の宴会で互いに酒を注ぎ合う「お酌」という習慣だ。当初同僚教師とは笑顔は交わせても、英語を話せる人が少なかったため会話が続かなかった。しかし、宴会では互いにお酒を注ぎ合うだけでその場に溶け込めた。「イギリスでは互いに酒を注ぎ合う習慣がないので最初は驚きでしたが、これは言葉がなくても年齢や先輩・後輩の別なくコミュニケーションができる道具だと思いました」と話すハーバー氏は、お酌を通した非言語コミュニケーションを体験し、自然と日本酒へも興味を寄せていく。

ハーバー氏が日本酒にのめり込んだのは、現在も親交のあるふたりの友人の存在が大きいという。同じ音楽好き、

酒好きということで気の合った3人で地酒専門の居酒屋に通い、個性豊かな日本酒の奥深さを知っていく。やがて飲むだけに飽き足らず、滋賀や奈良の蔵元見学や酒造り体験、酒米の田植えなどにも参加するようになった。当初

J E T の派遣期間2年の滞在のつもりが、終了後も昼間は語学学校、夜は居酒屋で働きながら、先に奈良の蔵元に蔵人として就職していた酒好き仲間のひとりの伝で酒蔵を手伝った。

すでに清酒の売り上げは減少傾向、若い世代の担い手不足は深刻になっていた頃だ。いつしかハーバー氏の中で、日本が誇る伝統産業に対する危機感が膨らんでいった。そして1991年、25歳で奈良の梅乃宿酒造に蔵人として入ったのである。

日本酒の仕込み期間は半年以上、他の蔵人たちと寝食を共にし、24時間体制の労働状況だ。さらには慣れぬ杜氏制度など、戸惑いはなかっただろうか。「仕事は厳しいですが、酒造りは昔ながらのシステムが出来上がっている。また、現場の最高責任者であるおやっさん（杜氏）は絶対的な存在で、食事でも先に箸をとるまで他の蔵人は手をつけないといった決まりも、階級がはつきりしていてわかりやすい。古いというよりむしろ機能的だと思いました」

梅乃宿酒造に入って10年となる2001年、ハーバー氏は合格率5割とい

日本に思うこと、今後なすべきこと

来日して28年、酒造歴25年、日本の年月の方が長くなったハーバー氏は、今の日本をどう感じ、今後何をなすべきだと考えているだろうか。

ハーバー氏自身がなすべきことは「当然、日本が誇る伝統的な日本酒をさらに普及させること。無形文化遺産である和食に合う日本酒は、日本を知ってもらうためにも大きな武器になると思います。その素晴らしさをもっと伝えたい」と語る。

また、海外からの観光客にあふれる現在の日本には「経済的にはよいでしょうが、例えば心斎橋でも香港と同じようなブランド店が並び、ここはいいけどこの国だろうと思います。昔ながらの日本の風景がなくなっているのが残念」と、来日当時自転車で谷町や

う南部杜氏資格選考試験に合格する。外国人初の資格取得を「当時のおやっさんに『とりなさい』と言われると、やるしかなかった」と笑うが、10年間酒造り一筋であったからこそその難関突破であろう。

その後、大阪の大門酒造で杜氏補佐、茨城の須藤本家でも酒造りに携わった後、再び大門酒造に戻り杜氏となった。蔵人から杜氏へ。着実に修業を積んだハーバー氏は2007年、銘柄酒「玉



上／酒蔵に眠る古道具や古家具を蘇らせ
昨年新装された店舗
奥には試飲ができる
カウンターも。
下／社長の木下善人氏。

川」をつくる京丹後の木下酒造に杜氏として入ることとなった。

日本酒業界の歴史に残る存在

「初対面の私に、ハーバーは滔々と日本酒はどうあるべきかを語りました。その情熱たるやすごいもので、この人なら何かやってくれると、『あなたが造りたい酒を造ってください』と言いました」と話すのは、木下酒造11代目

茶屋町などの大阪市街を走りながら目にした「日本らしさ」が急速に失われているのを嘆く。

現在、仕込みのない時期は、今も豊かな自然が残る大阪府北部に住んでいるハーバー氏は、「まだ日本の原風景が残るところはある。今からでも、残すべきものは残しておかないと」と力強く語る。

さらに、長く日本に暮らすなかでハーバー氏が気づいたことがあるという。日本人が積極的な議論を好まないということだ。

「和を大事にすることはいいのですが、もっといい意味での話し合いをしてくことは必要だと思います。互いにつぶし合うのではなく、思ったことをきちんと話し合う機会がもっと必要だと思います」

一方で、コミュニケーションの方法自体には、母国との共通点を見出すことができるという。

当主の木下善人氏だ。40年以上酒造を支えたベテラン杜氏が亡くなり、天保13（1842）年より続いた酒蔵の廃業を考えていた時期だった。

それを受けてハーバー氏が提案した商品のひとつが、蔵に住みついた家付き酵母と呼ばれる酵母で発酵させる「自然仕込」の酒だ。培養した酵母を添加するより手間暇と高い技術を要し、製造リスクの高い酵母無添加の酒を手掛ける蔵は、全国でも僅かしなかつ



た。さらに、国内では若くて軽い味わいの酒が主流の時代にあって、ハーバー氏が造る酒は苦味・渋みなどの五味がしっかりあり、濃いのが特徴だ。木下氏にはこの時代にそれが受けるのか、という不安もあった。しかしハーバー氏の「木下酒造はマジョリテイに向けた酒をつくりたいのですか。2、3割であっても確実にこの味を好む人がいる酒を目指したほうがいい」という熱意に、もとより廃業も考えたのだから思い切って挑戦することにした。

「関西は、会話でのコミュニケーション法がイギリスやオーストラリアと似ているんです。例えば、大阪では営業マンはいきなり商談に入るのではなく、少し笑いをまじえた世間話をしてから本題に入るのが一般的です。常にユーモアをもつて会話をする関西の文化にはイギリスとの共通点を感じ、東京はむしろアメリカに似ていると感じますね」

相手との関係構築から始まる関西のコミュニケーション法が母国のそれと近いことが、日本になじめたひとつの要因かもしれないとハーバー氏は話す。異文化圏である大阪と母国のコミュニケーション法が通底すること、お酌を通した非言語コミュニケーションで日本に親しみ、酒造りを通して日本という国を多面的に知るハーバー氏が創り出す日本酒は、世界と日本を結ぶコミュニケーションツールとしても大きな役割を果たしそうだ。

「タイムシーン」をソフトクリームにかけた人気商品。濃厚で芳醇な甘さに驚かされる。



中／ハーバー氏が最初に挑戦した、玉川の「自然仕込」シリーズのひとつ。
下／江戸期の製法によるタイムシーンシリーズ。ラベルに当時の酒蔵を描いた「1712」（左）と3年熟成の「ビンテージ」。

「クールジャパン」のイメージを超えるサブカルチャー

取材・執筆／奥山 晶子 撮影／名取和久

日本アニメにみられる 深い共感性

フランスは、世界各地から20万人を超える来場者がある日本サブカルチャーの祭典、「ジャパンエキスポ」の開催地だ。このことから、フランスでは日本のサブカルチャーブームが沸騰しているという認識をもつ人も多いだろう。では、フランスで初めてヒットした日本アニメは？

「その答えは、1978年に国営第二チャンネルで始まった『UFOロボ グレンダイザー』です」とブルネ氏。日本ではやや認知度が低いアニメながら、フランスではSFブームの波にも乗り100%に近い視聴率すら叩き出したことがあるという。

撃は、氏の著書『水曜日のアニメが待ち遠しい』に詳しい。70年代後半、全国放送のテレビチャンネルが国営第一・第二の2つしかないフランスでは、熾烈な視聴率争いがあった。『グレンダイザー』の成功以降、日本アニメは子どもに受けると判断した両局は、『宇宙海賊キャプテンハーロック』『科学忍者隊ガッチャマン』など日本アニメを次々と放送し、ヒットを飛ばしたという。

技がフランス固有の名称に翻訳されるなど、違和感なく受け入れられるような工夫があったためだ。ブルネ氏は著書でそれを、つくり手たちは何ら意識していないながら、子どもたちにとっては「刷り込み」だったと表現している。「この時期の子ども向け番組でのアニメの紹介が、現在にまで至る、フランスにおける日本のサブカルチャー需要のビッグバンだったことは間違いありません。実際、この時期に一種の刷り込みを受けたことで、それ以降、何の抵抗感もなく日本のサブカルチャーを楽しめた僕らの世代は、フランスにお

「クールジャパン」の代名詞のように扱われる日本のアニメやマンガの世界。海外でも人気は高いが、実際にどのように彼らが受け止めているのかを日本人が知る機会意外と少ない。自ら「オタク」と公言し、日本史学研究者や翻訳家という顔ももつトリスタン・ブルネ氏に、母国フランスでの日本アニメ・マンガブームを軸とした日仏両国の社会情勢や精神性など幅広い独自の視点で、日本のサブカルチャーの過去・現在・未来について語っていただく。

けるオタクの第一世代と呼び得る存在となっていたのです」

日本のアニメは、「日本性」を強く意識させない形でフランスに登場したのだ。それにしても、アニメの制作国は日本のほかにもたくさんあったはずだが、そのなかで特に日本アニメがヒットしたのはなぜなのか。ブルネ氏は著書で、日本アニメが他国のものに比べて安く輸入しやすかったことも要因のひとつと指摘している。しかし、もちろんそれだけが理由ではない。氏は語る。

「日本アニメの魅力は、なんといっても深い共感性にあります。正義と悪の戦いを描くロボットヒーローものであっても、悪役は単に憎むべき対象ではなく、心をもった人物として登場します。時には悪役側に、自分の理想を求めて戦うといった共感可能な心理が潜



「UFOロボ グレンダイザー」
永井豪原作のマンガおよびアニメ作品
（日本では、1975年10月5日、
1977年2月27日の毎週日曜日に放送）。
フランスでは、ロボットアニメとしては
初めて放送されたもので、子どもたちに大人気となった。

ブルネ氏も度々訪れている
オタクの聖地
「まんだらけ」中野店にて。
お気に入りにはビンテージマンガや
関連雑誌が並ぶニア館。

トリスタン・ブルネ／1976年フランス生まれ。ジュネーヴ大学大学院博士後期課程在籍。日本史学研究者・翻訳家。オタク。日本のアニメ、マンガなどに造詣が深く、フランス語版『北斗の拳』など複数のマンガが翻訳に携わる。2004年の初来日以降数度の留学を経て、現在は日本に在住。大学や語学学校でフランス語、フランス思想の講師をつとめる。

トリスタン・ブルネ

Tristan Brunet

んでいることすらあるのです。日本アニメが丁寧に描き込んだ登場人物の精神的背景は、フランスの子ども向けアニメでは見ることでできないものでした。私たちは、そこに夢中になりました。

フランスの個人主義的な世界観は自由や権利を重視しますが、時にそれは自分たちの自由を阻むものを否応なしに敵とみなす矛盾をはらんでいます。一方、敵味方関係なく共感性を大事にする日本アニメから、私たちは世界の多面性を教えられました。それとは自覚しないまま違う価値観を得、自分たちの価値観を再考するようなこの体験は、まさに奇跡といえるでしょう」

アニメが象徴する 世界共通の感情

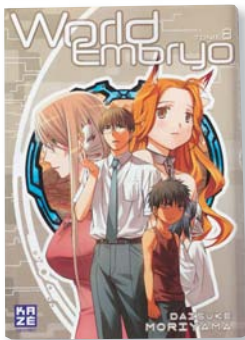
さらに、ブルネ氏は日本アニメにみられる「喪失感」にも注目する。著書にはこうある。

「『グレンダイザー』では、戦いによって人が死ぬということの現実がきちんと表現されていました。死んだのは敵だが、その死によって失われる何かがある、敵の人生にさえも価値があるというメッセージがあったのです。それは現実の戦争では誰しもが感じることでしょ。しかしそれを表現することとは、当時のアメリカやフランスでは、子どもにとって影響が強すぎるという

理由で避けられていたことでした。ところが日本のアニメは、こうした事実や感情に共感できる存在として、子どもを認めたと言えるのです。

フランスの大人たちが子どもたちに見せまいとしていたネガティブで複雑な感情を、子どもたちの心はちゃんと捉えていたのです。言語化できないモ

ブルネ氏が
フランス語に翻訳した
『ワールドエンブリオ』。
作者は森山大輔。



「ヤングエンタテインメント」
（少年画報社）にて、
2005年6月号、
2014年7月号に
連載された。

巨大ロボット作品のなかでも
特に憧れた『機動戦士Ζガンダム』。
アニメ監督の富野由悠季による小説本は
今でも大切にしている。



人気テレビアニメ
『機動戦士Ζガンダム』の総編
日本では1985年3月2日、
1986年2月22日の
毎週土曜日に放送された。

ヤモヤしたメランコリーを抱えながら生きる子どもたちに、日本のアニメはピタリとはまった。それは心の隙間を埋めるような行為だったのだと、今では思っています。

また、戦後まもなく、フランスではマンガを幼児向けと大人向けに分け、大人向けのマンガを芸術にまで昇華し

いても、この共感性や喪失感がヒットのかなめであったと考えている。

「他国のアニメファンと接していると、それぞれの国に、日本アニメが神話となるにふさわしい、それぞれの事情が存在すると感じます。しかし日本アニメに惹かれる理由はフランスと同じ、すなわち喪失感を伴う共感性です。終

ただ、ブルネ氏はこのブームに違和感を感じるという。「日本の作品」というパッケージ性が、純粹な共感や共鳴を邪魔するものとして作用し、今や広く消費されるためだけのものとなっ

てしまったのではないかと警鐘を鳴らす。

「日本のアニメやマンガに共感して交流を始めた私たちの世代と違い、今圧倒的多数を占めているのは『クールな日本のサブカルチャーを消費する人々』です。私は、『クールジャパン』という呼び名と戦略性が、逆に純粹なファンを遠ざけてしまうのではないかとという危惧もっています。それは作品にも垣間見られることです。登場人物たちへの共感や、喪失感といった面は薄れ、明るさやひたむきに焦点を当てるようになったと感じるからです。

現在の作品群のなかでも、琴線に触れるものはもちろんあります。学園SFアクションマンガの『ワールドエンブリオ』は、共感を丁寧に描いている作品だと感じて大好きになり、私自身がフランス語への翻訳を手掛けるほどのめり込みました。日本作品の素晴らしさは変わっていません。ただ、ブームを持続させるためには、『クールジャパン』というパッケージを飛び越えてヒットする作品の登場がなければならぬと思います」

「クールジャパン」という言葉のパッケージ性は強烈で、そのイメージを乗

ようという流れが生まれました。幼児向けは単純明快で面白く、大人向けは芸術作品として素晴らしいものになりましたが、その結果ティーンエイジャーを置き去りにしてしまいました。多感な少年少女が、日本のアニメに惹きこまれたのは当然でしょう」

ブルネ氏は、フランス以外の国にお

自国を離れた 視点をもつべき

り越えるのは容易ではない。しかしブルネ氏は、世界を席巻する作品が生まれる可能性は常にあるという。そのうえで、どんな作品が必要とされているかを教えてくれた。

「日本文化のひとつとしてのサブカルチャーを提供するのではなく、世界が共有するひとつの時代性を理解し、かつそれを反映させるという考え方が必

もうひとつ、作られた日本のイメージを乗り越えるという視点で考えれば、まだパッケージ性を感じさせないジャンルに可能性を見いだせるといえる。ブルネ氏はその可能性を、ボードゲー

日本のサブカルチャーを
「社会性と個人性の
間にある微妙な揺れ
と創造力」という
独自の視点で捉えた
自著『水曜日の
アニメが待ち遠しい』。



Tristan Brunet

要ではないかと強く感じています。私

が実際に体験したフランスでの熱狂は、まさに言語化できない感情の共鳴に端を発していたからです。それは、あの時代にしかりあえない精神性と作品の、奇跡のような共鳴でした。今の世代も、そのような経験をする可能性は十分に

あります」

戦から、いわば完全民主化に至るまでに各国が経験したメランコリーが、時代性をもった世界共通の感情として日本アニメに象徴されたのではないかと考えています」

フランスでは、70年代後半からのロボットアニメブームを経て、80年代後半には『めざん一刻』『きまぐれオレンジ☆ロード』『キャプテン翼』といった、日本の若者の日常を描くアニメが放送されるようになる。その頃にはまぎれもなく「日本のアニメ」として見られるようになるが、その世界観や価値観を、フランスの子どもたちはすでに親しみをもって受け入れるようになっていた。そしてフランス人は、日本アニメにますます熱中していくことになる。

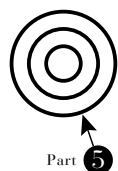
時代性を 丁寧に描けばヒットの 可能性は高い

フランスでは、1980年代から90年代にかけて起こったジャパンバッシングのなかで、日本のアニメもやり玉にあげられた。しかしそれは皮肉なことに、若者たちが貪欲に日本のアニメ、マンガ、ゲームへのめり込んでいく契機となり、2000年に「ジャパンエキスポ」が開催されると、日本のサブカルチャー人気は不動のものになってゆく。

「たとえば、フランスをはじめとした外国に人気の『DARK SOUS』という日本発のビデオゲームがありますが、日本では存在感が薄いようです。もちろん、そういったことは新しい現象ではありません。しかし違和感を感じるのは、日本が『クールジャパン』を意識すればするほど、外国人の興味からはどんどん離れていくということです。日本性を売ろうとするほどに、日本のアニメは広く文化を愛する人のためのものではなく、日本ファンだけのものになってしまいます。それは大変な矛盾です。まずは、日本のアニメがなぜこれほどまでに受け入れられたかを、きちんと自覚することが必要ではないでしょうか」

ブルネ氏自身、自国での日本サブカルチャーブームについてこのように考察することができたのは、日本を訪れるようになってからのことだという。日本とフランスの往復を繰り返して、「共感」の裏にあるものが少しずつ見えるようになった。「フランスを出なければ、曖昧に感じていたことを言語化することはできなかったでしょう」という氏の言葉に、一番のヒントがあるのではないだろうか。ブルネ氏は、他国の文化を吸収したうえで遠くから自国を見つめ、深く考えることで自ら「新しい視点」を獲得した。同じことが、今の日本人に求められているといっても過言ではない。

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



「論考」

「怪談」の作者として知られる小泉八雲ことラフカディオ・ハーン。風物、文化、民俗、宗教を織り込んだその作品群は日本という異文化への深い共感から生み出され、現代にも通じる視点を内包している。ハーンが見た日本人の信仰のありようを、ハーン作品と他の訪日外国人の記述の比較から描き出す。

ラフカディオ・ハーンが見た寺と神社の風景

日本人の宗教的な感性

Makino Yoko 牧野 陽子

写真提供／小泉八雲記念館

はじめに

明治以降、来日外国人が書き残した日本論や日本滞在記の類は種々多々ある。その中で、今なお読み応えがあるものといえば、やはり、まずはラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の作品をあげなくてはならないだろう。

ハーンというより、帰化名の「小泉八雲」の方が親しまれているかもしれ

ない。「雪女」や「耳なし芳一」、「むじな(のっぺらぼう)」などの作者としても知られている。これらの物語は日本の怪談として定着しているが、実は百年ほど前にハーンが日本の古い伝承や民話を掘り起して、再話した作品だった。

ハーンは、19世紀後半の人としては珍しく、西洋優越主義的な偏見にとらわれずに、優れた観察力と深い共感のまなざしで、日本の風物や文化、民俗、宗教について記し、明治期の庶民の生活と心情を描いた。土地の伝説や民間信仰、風習などを巧みに作品のなか



ラフカディオ・ハーンの肖像

織り込んで、日本の文化の魅力を描こうとしたのである。

ハーンはアイルランド系英国人の軍医を父に、英国軍が駐屯していたギリシャの島の娘を母に、ギリシャのレフカダ島で生まれた。だが、幼くして両親と別れ、アイルランドの親戚のもとで子供時代を過ごしている。その後、一人アメリカに渡って、シンシナティやニューオーリンズで新聞記者として活躍する。西インド諸島にも滞在して紀行文も刊行した。そして『古事記』の英訳を読んで日本に関心をもち、来日したのが39歳の時だった。まもなく英語教師の職を得て、松江の島根県尋常中学校に赴任し、ついで熊本第五高等学校、さらには東京帝国大学、早稲田大学で教えながら、『知られぬ日本の面影』、『東の国から』、『心』、『霊の日本』、『怪談』、『日本——一つの試

論』など、十数冊に及ぶ日本関連の著書を次々と発表している。松江で小泉セツと結婚、のち帰化して、1904年、東京の西大久保の家で没した。

西洋近代の価値観にとらわれぬものの見方や、庶民に寄せるまなざし、民俗的な関心といったハーンの特質は、ギリシャとアイルランドという、19世紀西欧世界の辺境かつキリスト教以前の古代世界につながる土地に出发点をもち、ギリシャの母への思慕とその母を離縁した父への反発、そしてアメリカの黒人社会やカリブ海のクレオール(*)の文化に触れたことのおかげで培われたと考えられる。さらにハーンの日本体験を決定づけたことは、最初の日々を東京ではなく、西洋化・文明化以前の古い文化習慣が色濃く残る地方都市で過ごしたことだった。

音の風景に描かれた生活のなかの宗教

『知られぬ日本の面影』(1894年)は、ハーンが日本に関して書いた最初の本で、来日直後の横浜周辺と、その後1年あまりを過ごした松江と出雲地方が主な舞台である。序文には、日本の知られざる精神風土を解明したいという目的が表明されており、明治日本の雰囲気と風景と土地の人々の暮らしがよくとらえられた作品と評価されている。

松江の朝を描いた「神々の国の首都」『知られぬ日本の面影』所収)の冒頭部分は、おそらくハーンの文章のなかでも最もよく知られた一節だろう。

松江の一日で最初に聞こえる物音は、ゆるやかで大きな脈搏が脈打つように、眠っている人のちょうど耳の下からやって来る。それは物を打ちつける太い、やわらかな、にぶい音であるが、その規則正しい打ち方と、音を包み込んだような奥深さと、聞こえるというより寧ろ感じられるように枕を伝わって振動がやって来る点で、心臓の鼓動に似ている。それは種を明かせば米搗きの重い杵が米を精白するために搗き込む音である。(中略)杵が臼を打つ規則的な、にぶく鳴り響く音こそは日本人の生活から生まれる物音のうち最も哀感を誘うものと私には思われる。実際それはこの国が脈打つ鼓動そのものである。

それから禅宗の洞光寺の大鈞鐘がゴーン、ゴーンという音を町の空に



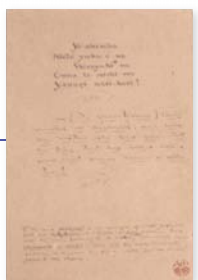
アメリカ滞在中にハーンが記したクレオール文化についてのノート。



『知られぬ日本の面影』2巻組
Glimpses of Unfamiliar Japan vol.1&2



1894年に発行されたハーンの代表作。



「雪女」
ハーンの自筆原稿。
(「天の川縁起」所収
「化けもの歌下り」)

響かせる。次に私の住む家に近い材木町の小さな地藏堂から朝の勤行の時刻を知らせる太鼓の物悲しい響が聞こえてくる。そして最後には朝一番早い物売りの呼び声が始まる。「大根やい、蕪や蕪」と大根そのほか見慣れぬ野菜類を売り回る者。そうかと思えば「もやもや」と悲しげな呼び声は炭火をつけるのに使う細い薪の束を売る女たちである。（『神々の国の首都』講談社学術文庫、1990年）

ハーンが、夜明けに耳にし、体で感じるのは、米搗きの杵の音である。その音は大地の底から枕を通して響いてくるようで、まさに日本の生活を下から支える音、この国が脈打つ鼓動そのものだ、ハーンは思う。

米を主食とする稲作の国にいうことを実感しているだけではない。米を搗く杵は、杵築の杵でもあることを想起したのでろう。出雲大社は古名を杵築大社といい、「杵築とは日本の太古よりの信仰、神道の最古の社を擁する聖地の名（『杵築——日本最古の神社』『知られぬ日本の面影』）である。だから、古代の神話世界につながる、神々の国、出雲の松江で聞く、大地の鼓動のような杵の音は、いわばハーンの考える神道を象徴する響きなのである。だ

日本人にとっては、ごく普通の何気ない光景だろう。だが、ハーンは、寺という信仰の場の明るさに驚く。祈りと礼拝はいたって短く、人々は互いに談笑し、子供たちの笑い声があふれている。ハーンは、そこに宗教の場らしい「厳かさ」がないという。そして人々の「信仰心のいかにも楽しげな様子」を「暗さ」や「自己抑制」から解放された、心のびやかな宗教のありかたとして感嘆した。

日本の寺の参拝風景に目をとめた人は、もちろん他にもいる。たとえば、1878年に浅草寺を訪れた英国の女性旅行家イザベラ・バード（1831～1904）は、次のような感想を述べた。

そこでもまた彼らはお祈りをする——もし「ナンマイダという」わけもわからぬ外国語の文句をただ繰り返し返すだけでお祈りと呼ばれてよいものならば。彼らは頭を下げ、両手を上げてこすりあわせ、言葉をつぶやきながら数珠をつまぐり、両手を叩き、また頭を下げる。それが終ると外に出るか、あるいは別の仏の前に行つて同じことを繰り返し。（中略）たいていお祈りは急いでなされる。つまらなくて長いおしゃべりの間に



ハーンとその家族。
左からハーン、
長男一雄、セツ夫人。

が、その神道の音のあとに、仏教のお寺の大きな鐘を打ちならす音が、次に町の小さな地藏堂の太鼓をたたく音が聞こえてくる。そして続くのは、往來を行く、さまざまな物売りの声である。その後、ハーンは障子をあけて、朝焼けの空と向こう岸の山々、宍道湖の広々とした情景を描く。川岸から、人々が朝日を拝む柏手の音が聞こえてきて、やがて大橋をわたる人々の下駄の音に変わり、一日の営みが始まっていく。

ハーンは、夜と朝のあわいに、宗教にかかわる想像をめぐらし、地元息づく神道と仏教の存在を感じ取っている。米搗きの杵、寺の鐘、地藏堂の太鼓、人々の柏手など、目に見えるものではなく、もっぱら音の響きに耳を澄ませて、より感覚的に、深い奥底からくるものの全体をつかみとろうとする。さ

らに、そうした感覚の広がりの中で、次に続くのが、往來を行く人々の下駄の響きであり、地元の物産を売る物売りの声なのである。つまり、宗教という魂の領域と、人々の日々の生活の情景。この二つがハーンの関心の中で、おのずとつながっていくわけで、ハーンの関心が赴くのは、生活のなかに根付き、根底で支えている宗教的なものだといつていい。

ハーンが描く 寺と神社の風景

このように、わたしたちはハーンの文章を読んで、明治日本の面影を懐かしく思い起こす。だが、それだけではない。現代におよぶ根本的な問

はさまれた単なる瞬間的間奏曲にすぎず、敬虔の素振りすらない。（『日本奥地紀行』、平凡社東洋文庫）

バードは英国で牧師の娘に生まれ、敬虔なクリスチャンとして伝道活動も行った人だった。そのバードの目には、浅草の寺の賑やかさは真面目な信仰とは別種のもの映った。大勢の人々が詣でるとはいえ、祈りはあまりに簡単で短く、みな気楽なおしゃべりに興じている。そこに敬虔な心など全くない、と、さぞ苦々しい表情を浮かべただろうことが、文面からうかがえる。そして当時の西洋の人の多くは、程度の差こそあれ、ハーンとは正反対のバードの言葉の方に同調したことだろう。

明治時代の38年間日本に滞在した、英国人バジル・ホール・チェンバレン（1850～1935）は、『日本事物誌』（*Things Japanese*, 1890）のなかで、「多くの日本人は、宗教は何かと問われると困惑する」と述べて、宗教に対する日本人のあいまいな態度を指摘している。チェンバレンは『古事記』や日本の和歌を英訳し、東京帝国大学文学部で言語学を講じた、著名な日本研究者である。そのチェンバレンは神道について、こう記した。「神道は、仏教が入って来る前の神話や漠然とした祖先崇拜と自然崇拜に対

して与えられた名前である。しばしば宗教として言及されているが、その名に値する資格がほとんどない。神道には、まとまった教義もなければ、神聖な書物も、道徳規約もない。そして、「神道は、あまりにも空虚で貧弱なもので、人々の心に訴えることができなかった」「神道の社殿は、原始的な日本の小屋を少し精巧にした形である」「神社は茅葺の屋根で、作りも単純で、内部は空っぽである」（『神道』『日本事物誌』）とたたみかけ、伊勢神宮についても、「観光客がわざわざこの神道の宮を訪ねて得るものがあるかといえば、大いに疑わしい」「檜の白木、茅葺きの屋根、彫刻もなく、絵もなく、神像もない。あるのはとても古い古さだけだ」（『伊勢』同）と述べた。

つまり、神道の「漠然とした祖先崇拜と自然崇拜」はあまりにもシンプルで、宗教にあるべきものが何もない、神社建築も同様である、というのが、西洋人である彼らが共有する認識だったということがわかる。

そして、このような神道論に対してハーンは、「神道には哲学はない。体系的な倫理も、抽象的な教理もない。しかし、そのまさしく『ない』ことによって、西洋の宗教思想の侵略に対抗できた」「神道を、およそ宗教とは言い難いものだという者もあるし、（中

を孕むような記述に出会って、はっとする。たとえば、来日当初、横浜近郊の寺めぐりをしたときのことを記した「地藏」（『知られぬ日本の面影』）という文章のなかで次のように述べている。

そんななかで、私が何よりも強い印象を受けたのは、人々の信仰心のいかにも楽しげな様子だった。暗さ、厳肅さや自己抑制といったものは、彼らには全くみられなかった。厳かさ、いやそれに近いものさえ、露ほども感じられなかった。明るい寺の境内や本堂の階段にまで、大勢の子供たちが賑やかに笑いさんざめき、奇妙な遊びに興じている。本堂の中にお参りに入る母親たちは、赤ん坊が畳敷の上をはいまわり、きやつきやつと声をたてても気にとめない。人々は彼らの宗教を気軽に、陽気に受け止めているのである。大きな賽銭箱にお金を投げ入れ、柏手を打ち、短い祈りの言葉を唱えると、彼等はすぐに向きかえり、お堂の上がり口で笑顔で語りあいながら、小さな煙管をふかすのである。いくつかの寺では、参詣者たちが中に入りもしないのに私は気付いた。自分たちが創りだした神々、それを畏れずることのない彼らこそは、実に幸いである。（前掲書）

略）、学者たちがなかなか神道を解きあかせないのも、畢竟、彼らが神道の源泉を書物ばかりに求めているからである」「しかし、現実の神道は書物の中に生きているのではない。儀式や戒律の中でもない。あくまで国民の心の裡に息づいているのである」と、出雲大社の訪問記（『杵築』『知られぬ日本の面影』）の中で反論した。

ハーンの反駁は、キリスト教に絶対的な価値をおくチェンバレンらへの反論としては、インパクトのある巧みな論法だったといえる。だが、「国民の心の裡に息づいている」とは、どういうことなのか、具体的に何がどのように息づいているのか、この反論だけでは、あいまいで、実感がわいてこないのではないか。

ハーンは、だから日本のさまざまな場面、空間を切り取って、ひとつひとつ描いていくことで、そこに息づくものの実感を提示する。教義や思想ではない幾多の空間の総体としての精神風土をとらえ、示そうとしたといえる。先にあげた、松江の朝の情景も、そのひとつである。

なかでも特に、ハーンが好んで描いた空間が寺や神社の境内だった。昼間、楽しそうな参詣者で賑わう境内は、夏の夜、盆踊りの舞台となる。ハーンは、山陰の海辺の小さな寺を訪

ねた折、月光に照らされた境内で、人々が輪となって歌い踊る様子に見入った。その傍らには寺の墓地があり、ハーンはお盆が死者の祭りであることに思いをはせる。そして戻ってきた先祖の霊の存在とともに人々が踊る空間の幻想性を描いた。〔盆踊り〕『知られぬ日本 の面影〕

子供たちが集まって遊ぶのも神社の境内である。ハーンは、西洋のキリスト教会の庭と、日本の神社の庭の違いは、子供たちの遊び声が聞こえるか否かだと記した〔日本——一つの試論〕、1904年〕。〔阿弥陀寺の比丘尼〕〔心〕、1896年〕という印象深い小品の物語世界を支えるのも、寺の境内で展開される光景に他ならない。村の子供たちは毎日のようにお地藏さまの見守るなかで比丘尼さんと遊ぶ。かつて幼子を亡くして出家した比丘尼は、子供たちとふれあって癒される。子供はやがて成長すると辛い現実社会へと去っていくが、今度はその子の子供たちが、また遊びに来るようになる。寺の境内は、代々の子供たちが遊ぶ、おだやかな救いの空間になっている。そして、ここでもハーンは、現在の子供たちと過去の、今は亡くなっている子供たちの面影をひとつの空間の中にこだまする遊び声の響きとして重ねるのである。

さまざまないのちのつながり ——日本の宗教的感性

ハーンは、日本の樹木信仰や御神木の風景にも心惹かれた。たとえば、『怪談』におさめられた「青柳物語」は人間と柳の樹の精が歌心を通じて結びあわされる話であり、「十六桜」は人間と桜の古木とが再生を通じて結びつく物語である。

そしてハーンは、そのような人間と深くつながる樹々に囲まれた空間として、神社を描いた。ハーンは神社にいたる参道の魅力について、次のように述べている。

数ある日本独特の美しい事物の中でも最も美しいのは、参拝のため、あるいは休憩のための小高い場所に上って行く途中の道である。それはいわば、無に通じる道、無に至る階段である。〔旅の日記から〕『日本の心』講談社学術文庫、1990年）
登りは石畳の傾斜のついた道とともに始まる。多分七、八町ほど続くが、その参道の両側に巨木が聳えている。一定の間隔をおいて石の怪物が警護している。道が尽きるあたりに幅の広い石段が何段もあり、緑

の暗がりの中を登ると、さらに大きな老樹が蔭をつくっている台地へと導く。そこからさらに段々が高い方へと続くが、いずれも緑陰の中である。登って登って登りつめ、ついに、灰色の鳥居の彼方に、目ざすものが見えてくる。小さな、中は空ろの、白木造りの社——神道のお宮である。荘厳な参道を長く歩いたのち、静まり返った影の中で私たちが受ける、はっとする空虚の感じは、幽邃な、霊的なもののものである。〔旅日記から〕『心』、河出書房新社、2016年）

ハーンはここで、鬱蒼たる緑のなかを進む参拝の道は「無に至る階段」であり、その到達点として「小さな、中は空ろの、白木造りの社」、つまり「神道のお宮」が現れるのだという。人はその「空虚の感じ」に包まれて驚く。いわば、自然のなかで人間が人工的なものを削ぎ落としながら、一步一步「無」と化し、自然と一体化して昇華されていくような空間を、神社にいたる参道に見出しているのである。ハーンはそのような神社空間で感得するものこそ、「霊的そのもの」だと表現した。ハーンの記述は、神社建築の簡素さを欠点とみなすチェンバレンへの反論としても読めよう。神道が、チェンバ

レンによれば宗教の必須条件たる聖典や聖像など、いわば人為的所産として構築された教理や表象物を排して、森の樹々とともにあること、簡素さを旨とすることを是としているからである。だが注目すべきは、宗教としての大事な部分を、ハーンが周囲の自然との関係性に見出したということではないか。巨木の蔭のなかに息づく太古の自然の霊性、いわば『いのち』に人間が一体化していく過程がここに描かれている。それは、いわゆる『自然崇拜』とも違うように思う。ここに描かれた神社は、自然のなかの聖なる場所を示す単なる指標なのではない。また自然を信仰の『対象』としているわけではない。

前述の通り、チェンバレンは、神道は「漠然とした祖先崇拜と自然崇拜」から成ると述べた。いいかえれば「先祖」と「自然」というそれぞれ別のものを崇める、二つの要素があることになる。

だが、ハーンの描く寺の境内や神社の参道には、その『祖先崇拜』と『自然崇拜』の違いを超えて、共通するものがあるということに読者は気付く。昼下がりの境内では、亡くなった人々の霊魂が子供たちの遊びを見守り、夏の夜は今を生きる者の踊りに寄り添う。神社の参道を登ると、老樹が太古の自然の霊性のなかへと人を包み込む。里

神社仏閣に詣でも、ハーンが横浜で驚いたような「穏やかな、気楽な笑顔」を浮かべるのであり、松江の朝の描写におけるように、神話も神道も仏教も民間信仰も、ポリフォニックなひとつの響きの空間のなかに溶けこむのである。

チェンバレンやバードは、人はひとつの宗教の教義だけを奉じるものだという前提にたって、日本人の宗教の『あ

いまいさ』を論じたが、現代でも事情はそう変わっていないといえよう。宗教的寛容性の必要が説かれるとき、それは、自分の宗教とは異なる他者の宗教を認めることを一般的にはいう。たとえば、ひとつの町のなかに、教会とモスクが争うことなく共存混在するような、多宗教社会である。だが、ハーンは、そのような宗教的寛容と多宗教の共存が、日本ではごく当たり前に一

そして、このような壮大な空間と時間

のいのちのつながりの中に、みずからの存在基盤を見出す時、いわゆる『宗教』の教義や思想体系、規律などを絶対視することはなくなるのではないか。それらは言語化された宗教的表現の形にすぎない。いいかえれば、根底にある日本人の宗教的感性の表層を飾るものとしてならば、そうした教義をも受け入れることができるのである。そして時には、表層を張り替えることもあれば、またひとつに拘泥することなく複数共存させることも、気楽に許容できるのではないか。だからこそ人々は



〔稲田の風景〕

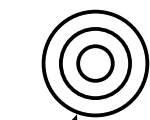
ハーンは日本の風景をスケッチでも数多く残した。〔稲田の風景〕には、鳥居が描かれている。〔Re-Echo〕46)

（*）植民地で生まれ育ったヨーロッパ人の呼称。

Makino Yoko

成城大学教授。1953年生まれ。比較文化学者。東京大学大学院博士課程修了。主な著書に『ラファディオハーン——異文化体験の果てに』『時をつなぐ言葉——ラファディオハーンの再話文学』、共編著に『講座 小泉八雲』など。

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



「論考」

『日本美の再発見』（1939年）などの著書で知られるドイツ人建築家ブルーノ・タウトは、20世紀前半に日本を訪れ、伊勢神宮や桂離宮に日本美の極致を見出し、当時の人々を驚かせた。簡素さや清澄さという日本の芸術的・文化的特質は暮らしに根ざしたものであり、今日なお古びることなき価値観として建築や美術、工芸などの分野に浸透している。いま見直すべき「日本的なるもの」とは何か。タウトの視点にその本質を学ぶ。

ブルーノ・タウトと日本文化

Ōta Takashi 太田 隆士

桂離宮と 郊外型集合住宅

ブルーノ・タウト(Bruno Taut, 1880-1938)というドイツ人建築家は1933年5月に来日し、桂離宮を訪れ「泣きたくなるほど美しい」と感動的に書き記したことで知られている。彼は装飾の少ない桂離宮を日本的な美を代表するものと高く評価し、いっぽう装飾に満ちた日光東照宮を「日本文化の大敗北」と酷評した。我々日本人はドイツからやって来た建築家により、日本



出典：『「国際建築1939年2月号」1939年2月10日、国際建築協会』

ブルーノ・タウトの肖像

建築のみならず日本の美が、桂離宮に代表される簡素さ、清澄さにあると指摘され、納得し、自国の文化に自覚と誇りをもったと伝承されている。ところでドイツの首都ベルリン郊外の集合住宅群が2008年に世界文化遺産に登録された。20世紀初頭、大都市の出現とともに住宅が不足し、低

所得者層が陥っていた劣悪な住環境問題を解決するために、合理的な間取りで割安な住宅が郊外に建設された。その大部分にかかわり主導した建築家の一人がタウトであった。なかでもブリッツ大規模住宅地区にある馬蹄型住宅がシンボリックな形状をしていることから注目を集めている。

労働者のための安価な住宅建築に尽力した建築家と、桂離宮に魅了される建築家、この両面をもつタウトとはどのような建築家であったのだろうか。また彼は約3年半の滞日中に、『ニッポン』、『日本文化私観』そして『日本の家屋と生活』と3冊の日本文化論を残し、それは今でも読み継がれている。しかし世界的に知られた建築家であったにもかかわらず、なぜか日本では建築の機会には恵まれず、旧日向家熱海別邸地下室が唯一の建築作品として残されているにすぎない。

この3冊の著作と唯一の建築作品を手懸かりに、彼はいつたい桂離宮の何

にそれほど感動したのか、そもそもなぜ日本に関心をもったのか、さらに彼の著作等を我々日本人はどのように受容してきたのか考えてみたい。

ジャポネズリーから ジャポニスムへ

タウトの1冊目の日本論である『ニッポン (Nippon)』には「1933年6月〜7月執筆」と記されている。そ

の中で自分と日本との結びつきについて語られている——「私自身二十歳の頃、刀身や布地の模様などの安価ではあるが複製ではない日本製の見本帳を何冊も手に入れていたし、日本の多色刷りの木版画の研究に精を出していた」。つまり彼は若い時期から日本の工芸や芸術に関心を抱き、自らの建築観を形成していた。

ココ時代に異国の珍しいものへ興味を示され、中国や日本の風俗および工芸への嗜好がシノワズリーとかジャポネズリーとよばれ人気をえていた。そして19世紀中頃に例えば絵画においては、3次元の世界を描き出すというルネサンス期以来の基本原理が見直され始め、ヨーロッパの芸術家たちは新たな啓示を求めていた。それは言葉の変化にもあらわれ、ジャポネズリーに代わりジャポニスムという言葉が使われ始めた。つまり日本の芸術・美学への関心は、

たんに異国趣味にすぎなかったものから造形原理・世界観を含むものとなったのである。作曲家クロード・ドビュッシーが交響詩「海」の楽譜を出版するとき、表紙に葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」を選んだのも1905年のことであった。

こうした時代の流れのなかで、タウトは『ニッポン』で外国からの訪問者として日本人が自覚していない側面を次のように示した。「今日の近代建築がこの世に生まれた頃つまり1920



桂離宮

タウトにより、
日本的な美を
代表する建築として
絶賛された。



ブリッツ
大規模住宅地区・
馬蹄型住宅

住宅と庭
つまり
外部環境との関係が
重視されている。

写真提供：PIXTA

出典：『Siedlungen der Berliner Moderne, 2009, Braun Publishing』

Bruno Taut

年頃、ヨーロッパの居住空間の簡素化を最も強く提起したのは、大きな窓や押入れをもちそして完璧なまでに純粹に設計された、簡素で完璧なまでに自由な日本の居住空間であった」。欧米化の道に突き進もうとしていた日本に、日本建築の純粹さや簡素さが素晴らしいものであり、ヨーロッパの住宅改革のモデルとすべきものであると指摘した。この点については来日前に書かれた著作でも言及されていた。まず「居住空間の簡素化」についてもう少し詳しく考えてみたい。

「kirei」あるいは『装飾と犯罪』

タウトの2冊目の日本論が『日本の芸術 (Japans Kunst)』（邦訳名『日本文化私観』）である。前著から約1年半を経て、内容的にも数段優れたものとなっている。その中で彼は日本の芸術の特質を日本語に見出したと書き記している。『美しい (schön)』と『澄みきった (rein)』ということを表すのに日本語は同じ言葉を用いるのである。すなわち『キレイ (Kirei)』という言葉を。日本人が普段「この水はキレイ」と言ったり、「この絵はキレイ」と何気なく用いている表現が、ドイツ

人タウトには注目すべきことであり驚きであった。こうした指摘は、慣れ親しんでいるが故に見落としてしまう日本語の特質に気づかせてくれる。

タウトの驚きの原因はじつは彼の建築改革の理念にあった。『新しい住まい』（1924年）のなかで「簡素な清澄さ (Reinheit) と各部屋に見通しがきくことは、女性の仕事量やそれに伴う煩わしさを減らし医者や薬への支出を削減するなど、それ自体ですでにとっても大きな治療効果を与えするという影響を及ぼすので、そのような住まいが美しいこと (Schönheit) もまた自明のことである」と論じられている。彼が建築に求めた新しさとは、清澄さ (Reinheit) を保持していることが美しさ (Schönheit) なのということであった。

それは建築のモダニズム運動の標語でもあり、市民社会に相応しい機能性や合理性に基づく建築が求められていた。オーストリアの建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) は「文化の進化とは日常品から装飾を取り除くということと同義である」と新しい時代を表現し、装飾は犯罪であるというセンセーショナルなタイトルの『装飾と犯罪』（1908年）を書いたのであった。このようにジャポニスムは建築のモダニズム運動にも強い影響を

与えていた。タウトの建築観もそうした時代のなかで形成され、それが実践されている日本を訪れ、「キレイ」という言葉に日本的なものの核心を見出した思いであっただろう。

もう一つタウトから見た日本語の特質を考えておこう。注目された言葉は *Art* を表現するものの一つとしての *shibui* であった。「渋い」は「趣味のよい、落ちついた、控えめな」と理解されている。しかし彼が注目したのは、*shibui* が芸術作品に対して用いられているのみならず、人の振る舞いや集団の雰囲気等すべてに用いられることであつた。すなわち日本語および日本においては、例えば *shibui* という審美的なものに用いられる言葉が、芸術の領域のみならず他のすべての領域に使われ、その社会のあり方を創り出し、律するものとなっていることであつた。それは深い叡知に基づくものだと褒め称えられているのである。

造形芸術から応用芸術へ

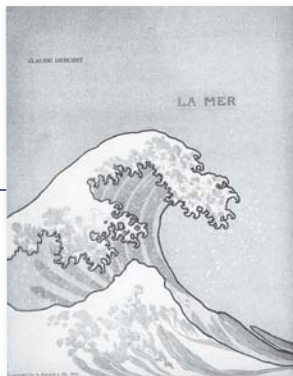
再度タウトの青年時代を想起しておこう。19世紀末から20世紀の初めにジャポニスムが、とりわけ家具、装身具そして建築の分野で力強く展開され、

た。こうした状況のなかで画家、工芸家そして建築家をも巻き込んで、ドイツ工作連盟（*1）やバウハウス（*2）が設立され、アール・デコ博も開催されたのであった。

住まいと生活

こうした歴史的経過のなかで *shibui* や *shibui* に着目するタウトには、欧米化を推進する日本が表面的なものを追っていると思えたに違いない。滞日中最後の著作である『日本の家屋と生活』が1936年2月に脱稿された。前2冊との重複も見られるが、最も充実した内容となっている。

まずタイトルについて考えておきたい。ドイツ語では *Das japanische Haus und sein Leben* である。日本語に訳すと「日本の住まいとその生活」となるが、「その」は「日本の住まい」を指しており、「日本の住まいの生活」という意味なのである。分かりにくいタイトルであるが、タウト自ら説明を試みている。日本の住まいにおいて、その背景は障子が開け放たれた先に見える自然であり、良い意味での野外劇場の舞台のようでもある。例えば夕方に小さな町を通りすぎると、床に座ったり横になっ



ドビュッシー
交響詩「海」
初版楽譜表紙

ドビュッシーは身の回りに日本の美術品を置いており、北斎の描く線の抽象表現に魅了されていた。



「日本文化私観」

タウトは色紙（しきし）に日本的な絵を好んで描き、ドイツ語版表紙には「仙台の紅葉」が用いられている。



出典：「日本——タウトの日記 1935-36年」
藤田英雄訳 1975年、岩波書店

左から村岡景夫、柳兼子、タウト、柳宗悦、河井寛次郎、バーナードリーチ（1934年）。

残念なことにこの傾向は今でも見られる。

建築上の「軸をずらすこと」にも強い関心が向けられている。小さな住まいから桂離宮にも見られるこの特長は、外から視かれにくいという機能をもつと同時に、非対称の美を生み出ししていると評価されている。タウトは「軸をずらすこと」はギリシアにおいてもあったことであり、それがローマにより軸が強要されるようになったが、これは野蛮化であったと見なしている。

工芸品のような住まい

約3年半の滞日中の建築作品が唯一つだけ残されている。旧日向家熱海別邸である。これは地下室を改造したもので、広さはわずか約130㎡にすぎない。ベルリン郊外の集合住宅群において1万2000戸もの住宅を建設したタウトにしてはまことにささやかなものであり、かつては否定的に評価されてきた。しかし近年、隈研吾著の『自然な建築』などでも好意的に論及されている。またタウト研究家であるシュバイデルは「旧日向邸の部屋と椅子をはじめとした家具が、タウトの造り上げたものの中で、最も美しいもの

であることには疑問の余地はない。それと同時に、タウトの最後にして見事なまでに完成した作品である」と位置づけている。この地下室に足を踏み入れると、まるで工芸品のような住まいだと感じられる。

旧日向邸改造の際にタウトを支えた最も重要な人物は吉田鉄郎（1894（1956）であった。日本のモダニズム建築の代表作である東京中央郵便局旧局舎は彼の代表作の一つであり、さらに日本の建築、住宅そして庭園について3冊の著作をドイツ語で執筆し出版したことも大きな功績を残した。吉田はタウトと旧日向邸について「日本間はタウト氏が最も尊敬してやまない小堀遠州の作品を御手本として作ったものであろう。小壁に吊束（*3）を見せていないところ、欄間の取り具合、長押（*4）をつけなかったこと等々。短い日本滞在中によくこのように日本建築に対する理解を深めたものだと思う」と報告している。

旧日向邸において注目すべきことは、傾斜地にある地下室であるが故に、平面的には「く」の字型に曲がり、さらに室内には海に面した側と山側とで約90cmの高低差が生じているにもかかわらず、こうしたことすべてを利点としていることである。竹の壁面や漆塗り家具とともにタウトが最大の関心を払

ったのは、室内と室外との関係である。各部屋には角度が変わることですれぞれ異なる海の佇まいが眼前に広がり、さらに床面から階段状に上壇の間につながれている洋間と日本間では様々な高さから室外を眺められるようになっている。また畳の黒い縁はすべて海に向かうように敷かれており、視線を自然に海に誘導する。タウトの提唱した建築理念の一つに屋外居住空間（Außenwohnraum）というものがあるが、これは室外の空間を居住空間と見なすものであり、室外の居間とも言える。旧日向邸でもその理念は健在で、立地条件を活かして、住まいと人との海との絶妙な関係がここに実現されている。

ミスリーディングと タウト受容

ここまでの考察から、タウトが桂離宮を訪れ「泣きたくなるほど美しい」と感動したのは、その簡素さもありはしたが、建物と庭園との見事なまでの関係であったと理解できよう。庭園つまり自然と連なり調和した建築であり、さらには「野外劇場」のような室内と室外の関係であり、さらには住まいと生活との関係であった。ブリッツの馬

蹄型住宅において試みられていることもまさにこのことだったのである。弧を描いた建物の中庭側の窓からは池へと連なる窪地にまるで自宅の裏庭のような景色が見え、裏庭など持てない低所得者層に快適な居住空間を与えているのである。

タウトは新しい建築を目指すなかで、日本の工芸や建築に関心を抱き、日本文化を自らの教養体験のなかに含めていった。であるからこそ来日し、短い間に日本文化の特質に深く分け入り、日本人が注目する著作を残すことができた。ドイツ人が小堀遠州や狩野派について熱く語る姿勢も深い共感を呼び起こした。実り豊かな文化とは、「内」なる自分と「外」なる他者との絶えざる対話の中から生まれてくるものなのである。

ただタウトおよび彼の著作に接するときに忘れてはならないことは、当時は日本もドイツも極端な国粹主義と戦争という最悪の時代にあったことである。彼の著作にも彼を受容した研究者にもその影響を読み取ることができる。残念なことであるがタウト・ブームおよびその受容において、彼の一面だけが取り上げられ、決まり文句と化し、必ずしも正確なタウト像が伝えられていない。彼を白木の美しさのみを追求した美学の持ち主であるとか、建築の

モダニズム運動を推進しただけの建築家であるとか見なしてはならない。彼はむしろ色彩を多用した建築家であること、彼にはすでにモダニズムを超えて建築と環境の関係を志向した建築観があることを理解すべきである。滞日中のタウトに最も身近で接していた人

物からの、実際に日々接していたタウトと日本の研究者が説明するタウト像とは別のようだったという証言を心に留めておいていただきたい。そのうえで彼の著作を手にとっていただきたい。この稿を結ぶにあたり、タウトが当時の日本建築について述べたことを引

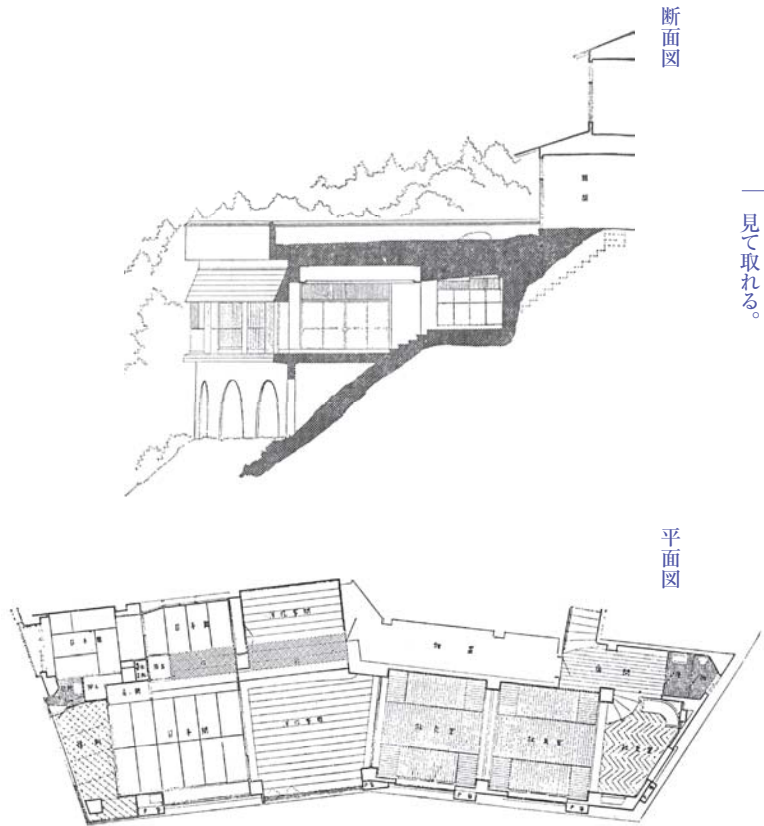
旧日向家熱海別邸
地下室の断面と
平面図

地下部分の
平面図からは、
「く」の字型に
曲がっていることが
見て取れる。

断面図

平面図

出典：長谷川亮「建築——館の視角」1973年、相模書房



1/300



右／竹の壁面と
檜材の床が美しい
社交室。
左／上壇の間をもつ
洋間。



用しておきたい。これは建築だけではなく日本文化全般について言えることだからである。

「民族的なものの力は、広い視野を持つ持つほど、そして民族がその民族性を喪失するのではと恐れなければいけないほど、いっそう強い。日本人のコスモポリタンのな特性は日本人をそのような民族主義的な墮落から守るであろう。質に関して現代日本の創り出すものは、それらがぜひでも日本的であろうとはしていないことによって質を保持しているものであり、そして日本的なのである」。

※「ツポン」、「日本文化私観」そして「日本の家屋と生活」の邦訳は参照したが、本文中の引用はすべて原文から新たに訳したものである。

（*1）製品の洗練を求め、産業育成を目指す改革運動を推し進めた。インダストリアルデザインはその活動に始まるとされる。

（*2）工芸、デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育と生産を行った機関であり、照明器具や椅子等のデザインで現代人の生活に決定的な影響を与えた。

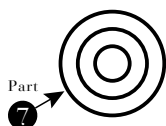
（*3）鴨居が長くなる場合に、垂れ下がりを防ぐために上からつり支える柱。

（*4）柱を水平方向につき固定するもの。いまでは装飾として用いられる。

Ota Takashi

1952年生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科修士（独文学）。1997〜2016年まで、駿河台大学教授を務める。NPO法人旧日向家熱海別邸保存会元副理事長。論文に「フルノ・タウトとジャポニスム」（駿河台大学論叢49号）などがある。

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



「論考」

暮らしの中で用いられてきた手仕事の日用品に「美」を見出し、物質的な豊かさだけではない生活を提唱し、現代の生活文化に大きな影響を与え続けている民藝運動。それは、柳宗悦とバーナード・リーチを中心に、志を同じくする人々との交流から生み出された。柳とリーチの足跡をたどりながら、内外の視点や東西の価値観の交流が新しい文化を生み出す過程を考察する。

「暮らしの美」への眼差し

柳宗悦とバーナード・リーチを巡って

Sugiyama Takashi

杉山 享司

写真提供／日本民藝館

西洋文化との出会い ——『白樺』同人として

日本を代表する思想家の一人で、民藝運動の創始者として知られる柳宗悦（1889～1961）は、海軍少将であった父・樞悦と、母・勝子の三男として、現在の東京都港区六本木に生まれた。幼くして父を亡くした柳は、母方の叔父にあたる嘉納治五郎の庇護のもとに育った。嘉納は教育者で、講道館柔道の創始者でもある。

柳は学習院高等学科在学中に文学雑誌『白樺』の創刊に参加する。同誌は武者小路実篤、志賀直哉らが中心となり、1910年に創刊号が出され、1923年までに計160号が発行された。『白樺』の人々は、キリスト教やトルストイの文学などに強い影響を受けながら、「自己に忠実に生き」「個性を伸ばすこと」を主張した。柳は最年少の同人でありながら、得意の英語力を生かして欧米の書物を渉猟し、宗教哲学の研究や西洋美術の紹介に努める一方で、『白樺』主催の洋画展覧会などにも手腕を発揮した。な



自宅書斎における
柳宗悦（1913年）。
当時24歳で、この年に
東京帝国大学を
卒業した。

お、英国人バーナード・リーチ（1887～1979）とも、この頃から交友が始まった。

誌上では同人たちが創作した文芸作品のみならず、西洋の美術作品も積極的に紹介され、近代精神を模索する若い文学者や画家、教師たちを強く惹きつけていった。

『白樺』が西洋文化の紹介に大きな影響を果たしていたことは、意外に知られていないが、クールベ、マネ、ルノアール、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン、マティスらをいち早く日本に紹介したのは『白樺』であった。

また、近代彫刻の父として知られるオーギュスト・ロダンとの交流も忘れてはならないだろう。ロダンの作品に命の輝きと魂の叫びを感じた彼らは、その日本での展観を願い、ついにはその熱意がロダンの心を動かして3点の彫刻作品を日本に送らしめたのである。

1913年に撮影された柳の書斎の写真には、ロダンから贈られた作品の一つ「ロダン夫人胸像」と、ゴッホの「二本の糸杉」の複製画が写っている。

なお、柳によってその才を見出され、後に世界的な版画家として活躍する棟方志功は、若き日に『白樺』に掲載されたゴッホの向日葵の絵を見て感激し、画家を志して青森から上京してきた。このように、『白樺』の周辺からは多

くの芸術家たちが誕生していったのである。

柳と バーナード・リーチの 出会い

『白樺』が創刊された頃の日本の若者たちの知的関心は、西洋のことにのみ向けられることが多かった。だが、そのような時代にあって、柳はその風潮にいたずらに染まることなく、東洋と西洋の文化を常に相対視する視座をかち得ていた。

それには、生涯の友となるバーナード・リーチの存在が大きく関わっていたように思う。香港に生まれたリーチは、生まれて間もなく母親を失い、日本で英語教師をしていた祖父に引き取られて、幼児期を彦根や京都で過ごした。やがて、学齢期を迎え英国本土に渡り、美術学校で絵画を学ぶこととなる。だが、父の死去により美術の道が閉ざされてしまい、一旦は銀行員として働くこととなった。

しかし、ラフカディオ・ハーンの世界などに魅せられたリーチは、美術への想いや日本への憧れを募らせ、ついには銀行をやめて、再びロンドンの美術学校に通うようになる。そして、その学校で日本からの留学生高村光太郎

Bernard Leach



Yanagi Muneyoshi

『白樺』創刊10周年記念写真（1919年）。
前列の左端が柳宗悦、
右から3人目が武者小路実篤。
後列の左から6人目がバーナード・リーチ、
右から3人目が志賀直哉。

とめぐり会ったことが、リーチの運命に大きな転機をもたらすこととなった。

1909年、高村からの招待状を携えリーチは再来日を果たし、東京に着後は、発足して間もない『白樺』の同人たちと交際を始める。そして、その親密なる交流は、両者にとって実に幸福なものとなった。西洋の価値観を押し付けることもなく、自ら進んで日本の文化を学び取ろうとするリーチは、明るく開かれた「西洋の窓」となり、瑞々しい息吹を吹き込んでくれたのである。

なかでも、柳はリーチとの親交を通して「美と宗教」への思索を深化させ、1914年には英国ロマン主義期の詩人であり画家であるウィリアム・ブレイクに関する本格的な研究書を著していく。ブレイクを柳に紹介したのは、まさにリーチであり、知識よりも直観を重視する考え方は、その後の柳の芸術に対する眼差しや思想形成に大きな影響を与えていった。

また、リーチも柳との交流の中で、美と生活に即した日本の芸術観や美意識を学び取り、それを自らの成長の糧としていった。そして、近代に生きる者として、希望や苦悩を彼らと共有し、芸術と生活との融合という新たな道を模索していったのである。

陶芸家 バーナード・リーチの 誕生

画家として出発したリーチが、初めて陶芸に興味を抱くようになったのは1911年のことである。友人に誘われて参加した茶会の席で、楽焼を体験したことがきっかけであった。早速、東京・入谷に住んでいた陶工・六世尾形乾山に入門。その時に通訳として同行したのが富本憲吉で、ついには後に富本も陶芸家として世に立つこととなる。

東洋陶磁の伝統に倣いつつ、西洋陶器の陶技や意匠を取り入れたリーチ独自の作風は、多くの人の注目するところとなった。そして、芸術家としての意識を保持しながら、暮らしを彩る器造りを模索する姿は、濱田庄司、河井寛次郎ら陶芸家を志す者たちに影響を与えていったのである。

ところで、リーチを虜にしたのは、祖国の伝統的陶器であるスリップウェア。スリップウェアとは、色の異なるクリーム状の化粧土で模様を描き、鉛釉を掛けて低火度で焼成した焼物である。英国では18世紀から19世紀にかけて、この手法により、台所や食卓で使う実用的で簡素な美しさを持った

パイ皿や水差などが、無名陶工たちの手によって数多く作られた。だが、産業革命が起こり機械生産の器が普及しだすと、しだいにその存在は忘れ去られていった。

そのような手作りによる生粋の英国陶器の存在をリーチに教えたのは、他ならぬ日本人の友である柳と富本であった。この二人は、1913年に『Quaint Old English Pottery（古風な英国陶器）（1909年）』という本の中でこの焼物を発見し、その二人の感激と驚きがリーチの心に火をつけたのであった。そして、英国にいた時には全く知る由もなかったスリップウェアに魅了されたリーチは、自らの作品にその手法や意匠を取り入れていくのである。

西洋の美術から 東洋の工芸へ

英国の伝統的陶器スリップウェアに向けられていた柳の眼差しは、時をほぼ同じくして朝鮮半島の器物にも注がれた。きっかけは1914年のことである。

当時、千葉県我孫子に住んでいた柳のもとへ、『白樺』の愛読者であった浅川伯教（のりたか）が、ロダンの彫刻を見るため

に、ソウルから朝鮮時代の焼物を手土産に訪ねてきた。浅川は教鞭を執るかたわら彫刻家を志しており、朝鮮陶磁史の研究にも情熱を傾けていた。

すると柳は、柔和な表情を持つこの朝鮮陶磁器にすっかり魅了されてしまった。スリップウェアの時もそうであったが、用いるために作られた器物が、なぜかくも美しくなるのか、その美の神秘に引き込まれていったのだ。

この出会いを契機にして、日常の器物に宿る、豊かな民族性や固有の造形美を見出した柳は、1921年には日本で最初の「朝鮮民族美術展」を開催し、翌年には『朝鮮とその芸術』などの出版物を刊行。1924年には「朝鮮民族美術館」をソウルに開設し、その美の紹介に努めた。

なお、柳の関心は「器物の美」に止まるものではなかった。ある場合には日本政府による植民地政策への批判となり、同化政策への異議申し立てや民族文化の擁護となって表れた。美しき器物への愛が、それを生み出した人々に注がれることは、柳にとっては当然のことであったといえよう。

だが、そのような柳の想いに対して、反感は日本側からだけではなく、思いもよらぬことに朝鮮の側からも起こった。「下賤な民の作った品々で朝鮮の美など語られるのは、誠に以て迷惑だ」

（柳宗悦「四十年の回想」1959年）
というのである。

誰からも顧みられることのなかった、職人の手になる民衆の日常の器物に美を見出し、それを美の対象として評価するということは、それほどに革新的なことであったのだ。

「暮らしの美」の発見

スリップウェアや朝鮮陶磁器との出会いによって導かれた、「暮らしの美」への眼差しが自国日本へと向けられた時、まず柳の眼を引きつけたものは、木喰（もくじき）仏と呼ばれる江戸期の民間の木彫仏であった。

従来の仏教彫刻の様式にとらわれない、奔放さと独創性を持ったこの仏像に着目した柳は、1924年から約3年間にわたり、その調査のために日本国中を巡ることとなった。ところが縁は異なもの、この木喰調査の旅は同時に日本各地の手仕事を発見する旅となったのである。

柳が見とどけたものは何であったのか。それは、彼自身が述べているように「極めて地方的な郷土的な民間的なもの、自然の中から湧き上がる作為なき製品に、真の美があり法則がある」（柳宗悦「木喰上人発見の縁起」1925年）という事実であった。

そして、濱田を介して河井と親交を結んだ柳は、木喰仏調査の旅の中で見つけた日本各地の手仕事や、英国の雑

器スリップウェア、京都の朝市で買い求めた下手物（げても）と呼ばれる日常の器物などを通して、民衆の日常品が宿す美に対する認識や共感を、彼らと深め合っ

ていくのである。
この3人によって、民衆的工芸の意から「民藝」という新しい語が生み出されたのは、1925年のことであった。民藝とは最も深く人間の生活に交わる品物の分野であり、民藝品とは生活の知恵や美意識が結晶化したものといえよう。

濱田や河井はそこから美の滋養を汲み取りながら、日々の暮らしに寄り添う品々を制作していった。一方のリーチも、英国に帰国した後もたびたび日本を訪れ、柳たちと小鹿田焼などの窯場を巡り、日本各地の伝統的な陶技を



「楽焼鬼文皿」

バーナード・リーチ作
我孫子窯
1917年

日本の楽焼と
スリップウェアの手法や
意匠を融合させた。
リーチ初期の代表作。



「染付秋草文面取壺」

朝鮮時代
18世紀前半

浅川伯教から
柳に贈られた
朝鮮の壺。

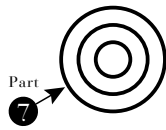


「緑釉櫛描水差」

バーナード・リーチ作
大分県小鹿田
1954年

小鹿田の土と釉薬、
伝統的な技を用いて制作された。
リーチ式のハンドルの付け方は
陶工たちに伝授され、今日では
小鹿田焼の新しい伝統となっている。

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



「インタビュー」

民藝運動の精神は、現代の生活のなかのデザインに、どのように受け継がれているのだろうか。世界的に活躍するプロダクトデザイナーであり、日本民藝館館長でもある深澤直人氏に、民藝の魅力と自身のデザイン哲学について語っていただいた。

ものの愛らしさを「民藝」に見る

構成／長井美曉

深澤直人氏に聞く

生活のなかのデザインで大切なこと

世の中にデザインされていないものはひとつもありません。見栄えのするものがデザインされたもの、と解釈する向きもありますが、どんなものも必ず、誰かがデザインしています。ただし、これはデザインされている、と多くの人が認めるものは、それなりの努力が見てとれる。生活に関わるあらゆるもののデザインに同等の努力が注ぎ込ま

れば、粗悪品が淘汰され、その結果、私たちの生活全体の水準が向上するでしょう。

ものの使い勝手を良くすることもデザインの大切な使命です。パソコンやスマートフォンなどがアップグレードを繰り返すように、家具や生活用品も少しずつ改良を重ねていく。新しいものを生み出そうとすることはかりがデザインではなく、こうした側面の方が昨今はより求められているように感じます。

私がデザインを学んだ1970年代後半はまだデザインが自己表現の一種、

アートの延長のように捉えられていま

した。しかし、社会に出てからは、いや、そうではないだろう、と反発する気持ち膨らむ一方でした。そんなときに「民藝」の思想と出会ったのです。作者の意図を前面に打ち出すのではなく、人々の生活に有用なものをつくるというスタンスでデザインに向き合いたいと考えていたところだったので、出会った瞬間にぴったり符合するものを感じ、鮮烈な印象を受けました。淡々とつくられるものの中から生まれる謙虚な美。デザインが目指すべき方向はこれだと開眼しました。アメリカに渡る

前、30歳を過ぎた頃のことです。

時代とともにデザインの意味合いも変わってきました。今求められているのは個々のものの確立というより、総合的な生活の雰囲気だと思います。椅子や食器といったものはあくまで生活の雰囲気を作っている分子に過ぎず、それらが渾然一体となったときに、なんかいいね、と感じる雰囲気が求められている。だからデザインに従事する我々は俯瞰した目を持ち、全体を統合することをイメージしながら分子をつくらなければなりません。すべての分子はつながっているという考え方で、

現代においてはそこにデザインの極みがあると言えます。私はそのような時代の変化からも、「民藝」の思想に通じる美の概念がデザインの送り手側にも受け手側にも浸透してきたことを感じます。

民藝の「愛らしさ」とプロダクトデザイン

民藝運動は日常の道具にひそむ謙虚な美を見いだしたことが評価されていますが、私は柳宗悦の一番の功績は、それらの「愛らしさ」を知らしめたことだと思っています。柳の収集品を見

渡すと、どれも実に愛らしい。彼ほもちろん自分の琴線に触れたものを収集したわけですが、それらの品々を目にしたとき、わあ、可愛い、と思わず手が伸びたのではないでしょうか。愛らしさには人を引き寄せる力があります。

愛らしさといえは、私はアジア圏の狛犬を集めています。名工の手になる彫刻のようなものではなく、掌になる大きさまでの素朴なもの。国や地域によつて顔がまったく違うのです。日本の狛犬は精巧につくられています。たとえば中国の狛犬はほとんど石の塊で、よく見れば顔があるかな、といった程度。でも、すごく愛らしい。自宅の棚にはほかに、北海道の名工に頼ん

だ木彫りの熊や、インドで手に入れた象の置物なども飾っています。

このようなものの愛らしさも「民藝」から私が教えられたことのひとつ。愛らしさは親しみを生み、親しみはものを大事にする気持ちを育みます。これはものづくりにおいてとても重要なことです。デザインはかっこいいものをつくることだと思われがちですが、かっこいいものには冷たさがあり、それは時に人を拒絶する。だから私も、あまりクールにならないように、どこかに愛着が感じられるデザインをいつも心がけています。美を突き詰めていくと、人が本能的にすり寄っていくような魅力にたどり着くのもかもしれません。

Fukusawa Naoto

1956年生まれ。プロダクトデザイナー。多摩美術大学教授。1980年多摩美術大学プロダクトデザイン科卒業。1989年渡米しIDEO入社(96年より東京支社長)。2003年NAOTO FUKASAWA DESIGN設立。2012年より日本民藝館館長に就任。著書に『デザインの輪郭』、作品集に『NAOTO FUKASAWA』など。

深澤氏がこれまでデザインを手がけたプロダクトの一部。生活の幅広いシーンで親しまれている。



±0／加湿器

水滴のような丸くふっくらしたデザイン。無駄なディテールを削ぎ落とし、やわらかく空間になしむ。

au KDDI/INFOBAR A03



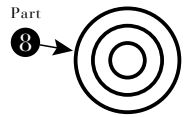
2003年の発売以来、6代目となるINFOBAR。携帯電話の技術は進化したが、変わらぬモノの魅力を保つ。



無印良品／壁掛式CDプレーヤー

紐を引くと、風のかわりに音楽が流れ出る。換気扇のような形の壁掛式CDプレーヤー。

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



「論考」

ルース・ベネディクトの『菊と刀』をはじめ、日本論にはさまざまなものがあるが、それら国内外の交錯する眼差しから確立された日本の「自画像」とはいかなるものか。「欧米的個人主義VS日本的集団主義」という観点を軸に、日本の在り方を規定してきた知られざる語りの系譜を辿り直すことで、自文化の前提を問い直し、新たな自己発見の可能性を探る。

戦後日本の復興と日本的集団主義

バブル崩壊後、景気低迷が長期化している今日では夢物語のようだが、戦後の廃墟から1950年代の高度経済成長を経て、1970年代には「20世紀の経済的奇跡」とまで言われた復興を日本が成し遂げると、世界の人々は拍手喝采した。そして、多くの海外の学者が日本の成功の秘訣を探ろうとした。そうした時代に強調されたのが、終身雇用・年功序列・企業組合を3本柱とする「日本的経営」であった。同時に、日本の会社は単なる利益追求を目指す個人の集合ではなく、労資が一体化した家族のような存在だという「経営家族主義」論も盛んに唱えられた。会社を家族になぞらえる経営家族主義には、全体のための自己犠牲を厭わ

策も充実しているので、会社への忠誠心や一体感が自然と養われる。それゆえ、日本の会社は「価値、先祖、信仰を共有する拡大家族」なのだ、とアベグレンは論じた。彼は無条件に日本を賞賛したわけではないが、戦勝国アメリカの学者が日本の企業文化を認めたことに、多くの日本人は自負心をくすぐられた。

この手の議論には、明治以降の度重なる労働争議や労使の対立を看過しているという批判があるが、少なくとも英語圏では大きな影響力をもった。たとえば、イギリスのロナルド・ドーアは、『イギリスの工場・日本の工場』（原著1973年）の中で、両者の根本的相違はイギリスの個人主義と日本的集団主義にあると説いた。彼によれば、会社と社員の利益が反する場合、日本人ならば多少の自己犠牲を厭わず会社のために尽くすが、イギリス人にそうした期待をするのはまず無理だという。それだからこそイギリスは斜陽で、日本は成長したというわけだ。ドーアは、日本人は「会社という家族」のために自分の家族を犠牲にしがちであると警告する一方で、「逆収斂」という概念を提唱した。これは、近代化の遅れた日本が欧米先進諸国に収斂する（＝いずれ同化する）のではなく、近代化に遅れたからこそ日本には「後発効果」があるので、いずれ欧米が日本に収斂するという考えであった。欧米を発展モデルとする近代化論の逆を行ったのである。

戦後の日本経済が絶頂期を迎えつつあった1979年、1冊の衝撃的なタイトルの本が出版された。『ジャパン・アズ・ナンバーワン』がそれで、著者はハーヴァード大学教授のエズラ・ヴォーゲルであった。彼によれば、日本の大企業が国際的成功を収めたのは、集団への忠誠心が日本人に生まれつき備わっているからではなく――海外では日本の「侍」にそうしたイメージがついている――、個と全体の調和を重視する日本の組織風土が社員の帰属意識を強め、それが高い生産性に寄与したからである。ヴォーゲルは1960年代に東京近郊の自治体を調査した硬派の社会学者であったが、一般向けのこの本では、日本の成功を鏡として自己満足に陥りがちなアメリカ人に反省を迫った。副題が「アメリカへの教訓」となっていた所以である。もともと、日本の多くの読者は『ジャパン・アズ・ナンバーワン』というタイトルそのものに酔った。

日本人学者と経営者の影響

こうした議論が世界を席巻する中で、日本の学者はどのような役割を果たしただろうか。一見、海外の論調は日本国内の議論と無関係なように思われるが、実

日本の自画像の系譜

欧米的個人主義 VS 日本的集団主義

ない日本人的性格も含意されていて、そこそが欧米の個人主義に対する日本的集団主義の極みとして理解されたのである。

海外の代表的「経営家族主義」論

こうした議論に先鞭をつけたのが、ジェイムズ・アベグレンの『日本の経営』（原著1958年）である。原副題「その社会組織の分析」から明らかのように、彼の力点は経営の社会的側面にあった。アベグレンによれば、使い捨てのアメリカの労働者とは対照的に、日本では大企業の社員もまるで家族の一員のように扱われていて、退職まで仕事は保障されている。また、給与体系は生産性と直接関係ない社員の年齢や家族構成といった社会的考慮に基づいているうえに、福利厚生

は陰に陽に日本の影響を受けている。そもそも、後述のように経営家族主義そのものが明治日本で生まれた概念なのだが、日本の会社を家族に比した外国人学者の多くは、産業社会学者で『日本の経営』（1984年）を著した尾高邦雄や、社会人類学者で文化勲章を受章した中根千枝の影響を受けていた。特に、中根の『タテ社会の人間関係』（1967年）は、1970年に *Japanese Society* として英訳され、海外における日本研究の必読書となった程である（ただし原典と英語版では構成と表現がかなり違う）。

私の専門は文化人類学なので、中根についてもう少し詳しく述べると、彼女は「場」と「資格」という対概念を提示して、日本における場の重要性を強調した。大学を例にとれば、教授や事務員や学生といった資格の差を乗り越えて、同じ大学という場を共有することにより醸し出される一体感が大切なのだという。場を共有する者は「ウチ」であり、それ以外の者は「ヨソ」である。そして、この日本の場の原型は生活の場としてのイエ（家）にあり――イエは家族の他に同居する親族や住み込みの従業員などを含む生活集団として理解される――、会社を含むすべての日本の組織はイエの構造的拡大に他ならない、というのが中根の主張であった。JRが「国鉄」と呼ばれた時代に「国鉄一家」という標語があったが、中根によれば、それは日本人のイエ意識の反映に他ならない。海外の経営家族主義論者にとって、中根の著作は日本のエスタブリッシュメント（主流派）からの格好のお墨付きとなったのである。

お墨付きを与えたのは学者だけではなかった。経営者も日本の伝統としての経営家族主義について積極的に発言した。その代表がソニーの盛田昭夫で、彼は *Made in Japan*（1986年）という外国人読者向けの著書で、「日本の経営者のもっとも重要な使命は、企業内に家族的雰囲気を作ることである」と公言した。日本の文化ナショナリズムを研究した吉野耕作によると、いわゆる日本人論・日本文化論の最大の消費者はビジネスマン、特に海外進出を果たした大企業の戦士であったという。異文化折衝の現場に立たされた彼らは、盛田のような発言を携えて外国人と交流したのだろう。

経営家族主義と家族国家観

ここで歴史を振り返ると、経営家族主義は明治以降の家族国家観と深い関係がある。家族国家観とは、日本を1つの大家族とみなして、天皇と臣民の関係を「家

長と赤子」および「本家と分家」になぞらえたものである。そこでは、親に孝を尽くすように天皇に忠を尽くし、家の先祖を貴ぶように皇室の神を貴ぶことが求められた。家族国家論は明治20年代から説かれ始めた国家イデオロギーで、学校では修身の授業を通じて全国的に浸透し、第2次世界大戦敗戦まで猛威を振るった。その法的基盤は家制度を規定した明治民法（1898年施行）にあった。会社を家族になぞらえる経営家族主義は、国家を家族になぞらえる家族国家論のミニチュア版である。

経営家族主義を早くから標榜した官営企業は国鉄であった。鉄道院初代総裁の後藤新平は、従業員に対して「鉄道従業員はすべて家族たるの精神をもって」「常に家の名譽利益のために活動すべき」と説き、「国鉄一家」意識を植え付けた。1908（明治41）年のことである。大正時代が近くなると、資本家は盛んに経営家族主義を持ち出して、労働者の待遇改善要求に対処しようとした。その典型が工場法（1882年立案、1911年成立）にまつわる論争で、多くの有力資本家は、権利と義務を中心とする欧米の個人主義に由来する工場法は、家族主義を美德とする日本には合わないという論陣を張った。同様の論法は労働組合法にも見られた。法案は1920年頃に起草されたが、日本の「醇風美俗」を説く資本家によって幾度となく阻まれ、法律制定は終戦後まで持ち越された。

ここで日本人論・日本文化論の観点から注目すべきことが1つある。それは、欧米的個人主義と日本的集団主義というパラダイムが、既に明治大正の日本人の言説に見られたという事実である。しかも、集団主義（この場合は経営家族主義）は常に個人主義と対峙する形で語られていて、欧米との差異を正当化し日本の独自性を主張するために持ち出されているのである。不思議なことに、欧米の個人主義は所与として措定されていて、その内実が問われることは今も昔もほとんどない。ただ、日本の政府や資本家が個人主義を警戒したのは、労働運動の背後には共產主義思想があり、共產主義は究極的に欧米の個人主義に由来すると思われる。だから、という事実は覚えておくべきだろう。

欧米的個人主義vs日本的集団主義

――知られざる海外の知的系譜――

いったい、欧米的個人主義と日本的集団主義という語りは、いつ誰によって始められたのだろうか。ものごとの起源を問うほど難しいことはないが、私の見立

てではパーシヴァル・ローエルの『極東の魂』（原著1888年）に1つの原点があるのではないかと思う。今日では内外ともに注目度は低いが、かのラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が日本を訪れるきっかけを作った本と言えば、関心は一気に高まるだろう。興味深いことに、そのローエルは大森貝塚を発見したエドワード・モースのアメリカでの講演に触発されて訪日したという。以下、個人主義と集団主義を中心に海外の日本人論・日本文化論の系譜を簡単に辿るが、年代順に流れを追うのではなく、読者に馴染みの深い戦後の著作から明治時代に遡って記す。

1 R・ベネディクト『菊と刀』（原著1946年）

アメリカを代表する文化人類学者ルース・ベネディクトの『菊と刀』は、世界でもっとも多くの読者を獲得した日本論の1つである。ただ、彼女は日本研究の専門家ではなく、日本と関わりをもったのは戦時中にアメリカ政府の情報機関に配属されてからであった。また、日本を訪れたことがなかったため、事実誤認や誤解が少なくない。そのベネディクトが歴史に名を残したのは、情報機関の同僚の力によるところが大きい。

大方の解説書とは裏腹に、実はベネディクトが日本人の集団主義に触れた箇所はごく僅かで、第3章「各々其ノ所ヲ得」に多少見られる程度である。この章の焦点はアメリカの自由平等と日本の階層制度の比較にあり、出自や地位の差による束縛を嫌うアメリカ人に対して、日本人は「分相応」に振る舞うとされた。ベネディクトによれば、そうした行動を学ぶ場がイエであり、家長はイエの代表としてその名誉を守り、家人は各々の地位（嫡子の長男と次三男以下、実子と養子などの区分）に従って行動するようになるという。日本では「イエの意志への服従」が「共同の忠誠の名において要求される」というのがベネディクトの主張で、それは全体が個に優先する集団主義の言説と一致する。

2 J・F・エンブリー*The Japanese Nation*（1945年）

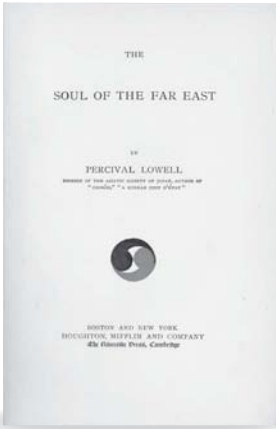
同じく文化人類学者のジョン・F・エンブリーは、戦前に熊本 of 農村を調査して『日本の村 須恵村』（原著1939年）という貴重な記録を残した。その彼が書いた本書（nationには民族・国民・国の意味がある）は、今日でこそ知る人ぞ知る存在だが、占領期には軍関係者を含むアメリカ人によって広く読まれた。一般書なので日本の社会文化的特徴を分かりやすく説明しており、所々にアメリ

	『極東の魂』
	パーシヴァル・ローエル
	Percival Lowell (1855-1916)

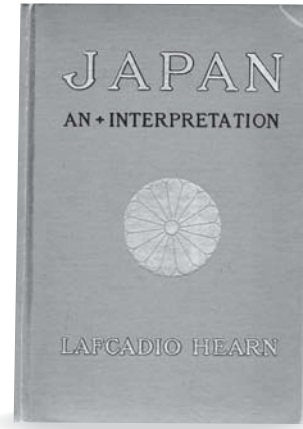
	『日本』
	ラフカディオ・ハーン
	Lafcadio Hearn (1850-1904)

	<i>The Japanese Nation</i>
	ジョン・F・エンブリー
	John F. Embree (1908-1950)

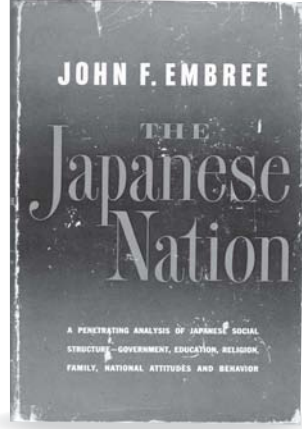
	『菊と刀』
	ルース・ベネディクト
	Ruth Benedict (1887-1948)



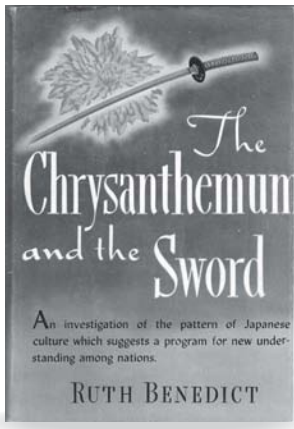
『極東の魂』原著初版(1888年刊)。
タイトルページには
東洋を象徴する太極図らしきものが
印象的に描かれている。



『日本』原著初版(1904年刊)。
金粉で施された菊の紋章は
皇室のものとして、
当時物議を醸した。



The Japanese Nation (1945年刊)。
下部には「政治、教育、宗教、家族、
国民のものごとに対する考え方や態度、行動まで、
日本の社会構造を鋭く分析」とある。



『菊と刀』原著初版(1946年刊)。
異国情緒漂う菊と刀の
イラストが目を引く。

カ人の個人主義と日本人の集団主義が対比されている。エンブリー曰く、「日本の政治構造全体の根底には多くの伝統的観念が潜んでいる。社会は個人より重要であるという考えはその1つだ」「日本文化は個人より集団の価値を重視する。日本人は自分のためではなく家族や国のために働くように教えられている。日本的イデオロギーにとって個人主義は罪である」「日本人は集団的連帯を強調する。それは自集団への忠誠という義務を含む。その結果、彼らは雇用者や家族の利益をはじめ、自分が所属するすべての集団の利益を守ろうとする」。

3 L・ハーン『日本』(原著1904年)

江戸時代末期の開国から明治中期にかけて、「お雇い外国人教師」を含む多くの知識人が欧米から訪れて日本の風俗について語った。しかし、その後は国際情勢の変化によって訪問者数も報告数も減っていった。明治後期の著作が多いハーンは、いわば第2世代に属する。今日、彼は日本人の間で『怪談』の作者として知られているが、当時の西洋では卓越した日本文化の紹介者として名を馳せていた。本書は彼の最晩年の著作である。

ハーンの日本観の1つの大きな特徴は、日本の歴史は日本の宗教の歴史そのものだという考えである。そのため、家族を論じるにせよ共同体を論じるにせよ、ハーンは日本人の信仰なくんずく祖先崇拜に注目した。また、意外にも彼はハーバート・スペンサーの社会進化論に影響を受けていて、家族内の祖先崇拜が共同体内の氏神信仰に発展し、それが国家の皇祖神信仰に発展したと主張した。『日本』の第5章「日本の家族」におけるハーンの叙述は、古代と現代の区別が曖昧だという欠点があるが、家族全体の利益が個人の自由を優先することを強調した点で、日本的集団主義を説いたと理解しやすい。ハーン曰く、「それほど個人は宗教的集団としての家族の犠牲になったことか」「祖先崇拜は個人の自由を認めなかった。誰も自分の快楽のままに生きることはできず、誰もが規則に従って生きざるを得なかった」「個人に法的地位は

大きく寄与した。ただ、ローエルには社会進化論者としての側面があつて、人間の精神は個人の成長とともに発達するので、没個性を特徴とする極東は滅びる運命にあると考えていた。当時の欧米列強の圧倒的力に鑑みれば、そうした考えを一笑に付すことはできないが、西洋文明の驕りが個人主義を集団主義の上に置いたことは確かだろう。

他者の眼差しがもたらすもの

以上、経営家族主義を中心に、内外の代表的な日本人論・日本文化論の系譜を辿った。最後に3つのことを述べて本論を閉じたい。

第一は、海外の文化人類学者の間では、エンブリーやベネディクトが日本研究の起点となっているので、それ以前との関係がほとんど問われていないということである。実はかく言う私も無関心だったのだが、10年ほど前にハーンの『心』(原著1896年)を読んでいたとき、彼の日本人の祖先崇拜の描写が、『菊と刀』でもっともよく知られた恩と義理の部分とよく似ていることに気づいた(詳しくは桑山編『日本はどのように語られたか』の序論を参照)。『菊と刀』には参考文献がほとんど掲げられていないので、ベネディクトの日本観がどのように形成されたかは長らく謎だったが、最近になって上述の情報機関の同僚——特に『日本人の性格構造とプロパガンダ』(原著1942年)の著者ジェフリー・ゴラー——の研究に影響されていることが明らかになった。おそらく、ベネディクトはハーンにも影響されていたであろう。本論で試みたように、明治大正期に日本を訪れた外国人の著作を丹念に読み込めば、見失われた戦前と戦後の接点が見つかるかもしれない。

第二は、モースが活躍した明治初期から、日本の知識人や指導者は、時として欧米人の日本論に感銘を受けながら、時として彼らに反発しながら自画像を描いてきたということである。そのことは、戦後直後に出版された『菊と刀』が、いまだに多くの日本人によって議論されていることから明らかだろう。既に述べたように、明治大正期に経営家族主義を説いた日本の資本家は、それを欧米の個人主義と対峙させて日本の独自性を主張した。同様の構図は、経営家族主義の基となった家族国家観にも言える。祖先／皇祖神崇拜の重要性を説いた彼らが意識していたのは、個人の信仰を重視するキリスト教と、そこから派生する(と想定された)個人主義である。その意味で、日本人が展開した集団主義論は、近現代

なく、家族が社会の単位であった」「家長でさえ法的には家族の代表者としてのみ存在した」。そして、続く第6章「共同体の祭祀」では、家族は地域共同体(村)の意志に従属したと論じたのであった。

4 P・ローエル『極東の魂』(原著1888年)

天文学者として知られたローエルは19世紀末に東アジア諸国を訪れ、同地域の精神文化に関する著作をいくつか残した。本書の主題は、「極東人」として一括

された日本人・朝鮮人・中国人の「没個性」(impersonality)で、その家族生活・言語芸術・宗教における様子が描かれている。没個性の対比概念は西洋の「個性」(individuality)である。

冒頭で西洋と極東はすべてが真逆だとしたローエルは、第1章「個我」で「我が西洋人の心の本質であるなら、極東の魂は没個性である」と説いた。そして、続く第2章「家族」と第3章「養子」では、以下のような議論を展開した。(1)極東の社会単位は個人ではなく家族である。(2)自己を中心に人間関係が回る西洋人の社会観は天動説的であり、極東人のそれは家族を回転軸とする。(3)極東の帝国は1つの大家族に、家族は1つの小帝国になぞらえることができる。(4)家長の権限は彼個人の力ではなく、家族の代表としての地位に由来する。(5)個々の家族成員の生活は家族全体の生活と不可分である。(6)養子をとるのは子どもへの愛情からではなく、家族の系譜を永続させるためである。それゆえ、極東では成人の婿養子が多い、等々。そのうえで、ローエルは極東の家族生活を誕生から結婚まで概観し、個人の行動が家族の名のもとに規制されている様を描いた。

対象を日本に限ると、家族国家観が登場する前に、「帝国は1つの大家族」と指摘したことは卓見である。また、西洋の個我と明確に対比する形で極東の没個性について述べたことは、後の個人主義と集団主義というパラダイムの形成に大

の覇権を握った欧米への「反覇権的言説」であった。当初、それは欧米の学者によって疑問視されていたが、戦後日本経済の復興をきっかけに肯定的に評価されるようになると、それが日本に逆輸入されて多くの日本人自身の自画像に取り込まれたのである。

第三は、いま述べたことと関連するが、自己像は他者像と表裏一体の関係にあるということである。それは、自己は他者との関係でのみ存在する、という事実から窺い知ることができよう。もっとも、すべての他者が自己にとって同じ意味をもつわけではない。自画像を描く際の「重要な他者」とは、肯定的にせよ否定的にせよ、自己が比較の対象として選んだ相手である。近現代の日本にとって、この重要な他者とは欧米であった。それゆえ、欧米人の日本に対する眼差しは、日本人の自画像に決定的な重みをもった。ただ、ここで注意すべきは、日本的集団主義のアンチテーゼとして措定された欧米的個人主義は、きわめて一般化かつ理念化された他者像であつて、その内実が十分検討されていないということである。実は、家族国家観を提唱した日本の知識人の欧米理解が浅薄であるという批判は、彼らの論敵によって度々なされていた。

この事実がグローバル化時代を生きる我々に与える教訓は明白である。それは、国内外で頻繁に接触するようになった外国人——人類学者は彼らのことを「異質の他者」と呼ぶ——に対する深い理解がなければ、十全な自己理解は有り得ないということである。そして、不完全な他者像に基づく教条化した自己像は、戦前の皇国史観を支えた家族国家観のように、偏狭なナショナリズムと排外主義をもたらすだけだということである。逆説のように聞こえるだろうが、健全で等身大の自画像を描くためには、鏡像としての他者を注意深く観察して描く必要があるのだ。



ラフカディオ・ハーン『日本』原著初版(1904年刊)の
タイトルページに描かれた巫女(の姿は、
日本の宗教にその文化的特質を見た
ハーンの考えを象徴している。

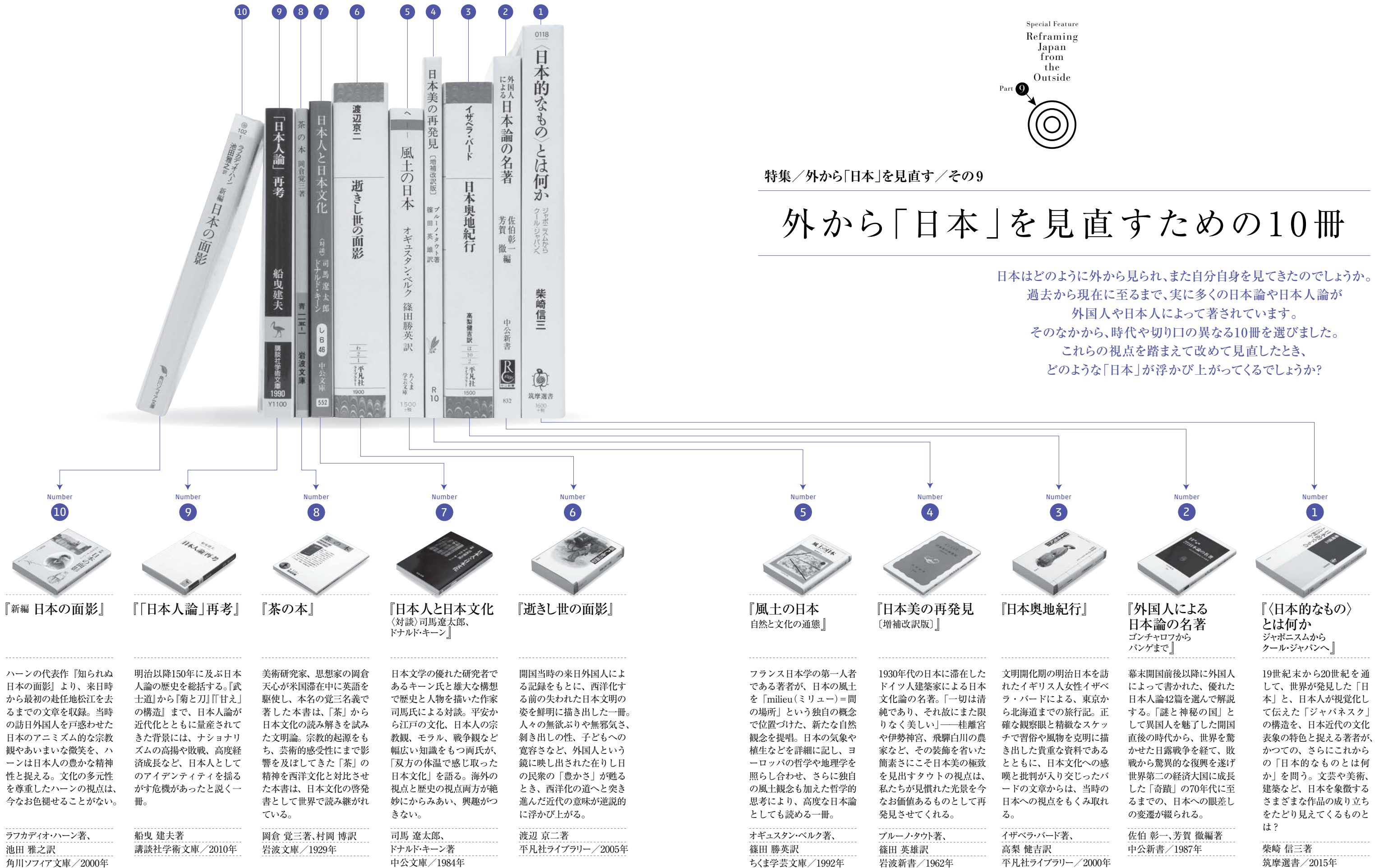
Kuwayama Takami

1955年生まれ。文化人類学者。カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士課程修了。米国ヴァージニア・コモンウェルス大学助教授などを経て、現在、北海道大学大学院文学研究科教授。著書に『Native Anthropology』(Trans Pacific Press)、『ネイティブの人類学と民俗学』(弘文堂)、編著に『グローバル化時代をいかに生きるか』(平凡社)、『日本はどのように語られたか』(昭和堂)など。

特集／外から「日本」を見直す／その9

外から「日本」を見直すための10冊

日本はどのように外から見られ、また自分自身を見てきたのでしょうか。
過去から現在に至るまで、実に多くの日本論や日本人論が
外国人や日本人によって著されています。
そのなかから、時代や切り口の異なる10冊を選びました。
これらの視点を踏まえて改めて見直したとき、
どのような「日本」が浮かび上がってくるのでしょうか？



ハーンの代表作『知られぬ日本の面影』より、来日時から最初の赴任地松江を去るまでの文章を収録。当時の訪日外国人を戸惑わせた日本のアニミズム的な宗教観やあいまいな微笑を、ハーンは日本人の豊かな精神性と捉える。文化の多元性を尊重したハーンの視点は、今なお色褪せることがない。

明治以降150年に及ぶ日本人論の歴史を総括する。『武士道』から『菊と刀』『甘え』の構造』まで、日本人論が近代化とともに量産されてきた背景には、ナショナリズムの高揚や敗戦、高度経済成長など、日本人としてのアイデンティティを揺るがす危機があったと説く一冊。

船曳 建夫著
講談社学術文庫／2010年

美術研究家、思想家の岡倉天心が米国滞在中に英語を駆使し、本名の覚三名義で著した本書は、「茶」から日本文化の読み解きを試みた文明論。宗教の起源をもち、芸術的感受性にまで影響を及ぼしてきた「茶」の精神を西洋文化と対比させた本書は、日本文化の啓発書として世界で読み継がれている。

岡倉 覚三著、村岡 博記
岩波文庫／1929年

日本文学の優れた研究者であるキーン氏と雄大な構想で歴史と人物を描いた作家司馬氏による対談。平安から江戸の文化、日本人の宗教観、モラル、戦争観など幅広い知識をもつ両氏が、「双方の体温で感じ取った日本文化」を語る。海外の視点と歴史の視点両方が絶妙にからみあい、興味がつきない。

司馬 遼太郎、
ドナルド・キーン著
中公文庫／1984年

開国当時の来日外国人による記録をもとに、西洋化する前の失われた日本文明の姿を鮮明に描き出した一冊。人々の無欲ぶりや無邪気さ、剥き出しの性、子どもへの寛容さなど、外国人という鏡に映し出された在りし日の民衆の「豊かさ」が甦るとき、西洋化の道へと突き進んだ近代の意味が逆説的に浮かび上がる。

渡辺 京二著
平凡社ライブラリー／2005年

フランス日本学の第一人者である著者が、日本の風土を「milieu(ミリュー)=間の場所」という独自の概念で位置づけた、新たな自然観を提唱。日本の気象や植生などを詳細に記し、ヨーロッパの哲学や地理学を照らし合わせ、さらに独自の風土観念も加えた哲学的思考により、高度な日本論としても読める一冊。

オギユスタン・ベルク著、
篠田 勝英訳
ちくま学芸文庫／1992年

1930年代の日本に滞在したドイツ人建築家による日本文化論の名著。「一切は清純であり、それ故にまた限りなく美しい」――桂離宮や伊勢神宮、飛騨白川の農家など、その装飾を省いた簡素さにこそ日本美の極致を見出すタウトの視点は、私たちが見慣れた光景を今なお価値あるものとして再発見させてくれる。

ブルーノ・タウト著、
篠田 英雄訳
岩波新書／1962年

文明開化期の明治日本を訪れたイギリス人女性イザベラ・バードによる、東京から北海道までの旅行記。正確な観察眼と精緻なスケッチで習俗や風物を克明に描き出した貴重な資料であるとともに、日本文化への感嘆と批判が入り交じったバードの文章からは、当時の日本への視点をもくみ取れる。

イザベラ・バード著、
高梨 健吉訳
平凡社ライブラリー／2000年

幕末開国前後以降に外国人によって書かれた、優れた日本人論42篇を選んで解説する。「謎と神秘の国」として異国人を魅了した開国直後の時代から、世界を驚かせた日露戦争を経て、敗戦から驚異的な復興を遂げ世界第二の経済大国に成長した「奇蹟」の70年代に至るまでの、日本への眼差しの変遷が綴られる。

佐伯 彰一、芳賀 徹編著
中公新書／1987年

19世紀末から20世紀を通して、世界が発見した「日本」と、日本人が視覚化して伝えた「ジャパネスク」の構造を、日本近代の文化表象の特色と捉える著者が、かつての、「日本的なものとは何か」を問う。文芸や美術、建築など、日本を象徴するさまざまな作品の成り立ちをたどり見えてくるものとは？

柴崎 信三著
筑摩選書／2015年

ふかいあきこ／服飾史研究家。京都服飾文化研究財団理事・名誉キュレーター。ファッションに関する展覧会を国内外で企画・開催。主な企画展に「華麗な革命」展（1989年）、「モードのジャポニスム」展（1994年）、「Future Beauty 日本ファッションの未来性」展（2012年）などがある。著書に『ジャポニスムインファッション』『ファッションから名画を読む』など。

NYのメトロポリタン美術館でKIMONO展が開催されたのは2年ほど前。レクチャーに呼ばれた。驚いたことには、会場は800人も聴衆で埋め尽くされていた。通常、私関連の地味で、少し専門的な講演会にこれほどの聴衆者が集まることは、絶対にない。えない。「きもの」の力、恐るべしである。

私は、きものの欧米への影響について、過去から現状までを話した。お気づきかもしれないが、最近、国内だけでなく、国外でも、きものへの関心が高まり、ファッションにきもの繋がりやデザインや技法がたびたび登場する。伝統がどうにも古臭く感じられた時代から、今、振り子は反対方向に振れている。

きものが、西欧の人たちを虜にした時期は、過去に2回ある。最初は江戸時代、オランダ貿易で海外に渡ったきものが、男性のおしゃれな室内着として着られた時。フェルメールの絵に見える。

次が19世紀後半から20世紀初め。1854年、日本が開国すると、浮世絵をはじめ日本品は海外で人気となる。きものもその一つだった。ホイットスラーの絵画に登場し、パリ・モードにも影響していく。

多くの西欧の人がきものを目にしたのは、1867年のパリ万博だった。正式に参加した日本から、3人の日本人女性が派遣された。きものの姿の彼女たちは、特設された日本家屋で見物客たちにお茶の接待をして、大変な人気を博したという。この時、日本女性のきもの姿は、強いインパクトを与えた。この万博を視察した後の実業家、渋沢栄一は、日記に「蟻が群がるように」彼女たちを見



パリ万国博覧会（1867年）の様子。
「イラストレーテッド・ロンドン」紙
1867年11月16日号

ようと集まった見物客のことや、きものを買いたいという若い女性が大勢いたことを記している。現地の新聞に掲載されたイラストからも、彼が記した情景が彷彿される。

女性雑誌には、「日本風」と称するファッションが登場する。以後、きものの影響がパリ・モードに現われ、きものはモネやマネの絵に取り上げられた。やがて、欧米にはKIMONOという語が定着していく。この時の日本熱は、後にジャポニスムと呼ばれ、特に浮世絵が印象派の画家たちに啓示を与えたことはよく知られる。きものもまた、欧米の生活文化に興味深い影響を残した。

フランスやイギリスの美術館を調査した時、19世紀後半に海外に多くのきものが渡り、それが今も收藏されているのを確認した。欧米は異国風というだけではなく、きものの高い美意識と品質を評価したのである。

それからずっと後、1980年代に三宅一生、川久保玲、山本耀司らによる日本のファッション・デザインがグローバルな評価を受ける。それは彼ら自身の優れた才能はもちろんだが、それを支えた連綿と受け継がれてきた日本のきもの文化の伝統、とりわけそこに携わった多くの無名の作り手たちの繊細な感性に対するものでもあった。

レクチャーの最後を、「きもの文化のレガシーは、日本の若いデザイナーたちに間違いなく受け継がれていく」と結んだ。その時の大きな拍手は「納得」と言ってくれたように思えた。



その1

生活者の
視点から考える
スマートコミュニティ

文／加賀城 俊正

48

Page

48

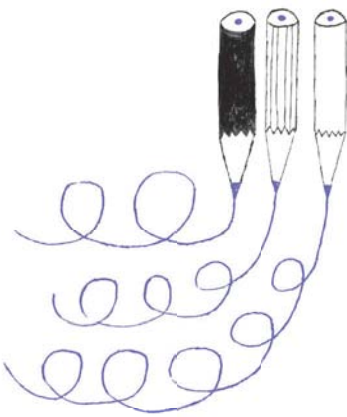
52

その2

高齢者の社会参加と
健康長寿の
関連性について

文／遠座 俊明

52



Page

56

Illustration by Akiyama Hana

CEL Insight

Vol.114 November 2016

The Reports from Researchers

CEL Output

Part 1 / Report by Kagajo Toshimasa

Part 2 / Report by Onza Toshiaki





生活者の視点から考える スマートコミュニティ

ICTの活用で、エネルギー利用率や環境性の向上が進むスマートコミュニティ。
一方、生活者はコミュニティに何を求めるのか、世界に先例のない超高齢化、単身化などが進む将来の社会像を見据え、どのような取り組みが必要となるのか。生活者の視点から、心豊かな暮らしを実現するスマートコミュニティのあり方を考察する。

住む価値が実感でき、 超少子高齢社会に対応できる コミュニティを目指して

① 人を中心として スマートコミュニティ を考える

ある講演会で、デンマーク大使館の方が、「日本とデンマークのスマートコミュニティの写真を比較して何が違うか？」と問いかけた。その答えは「人」であった。日本は、どのまちも整然とした施設の写真。一方、デンマ

ークは住む人の姿が常に写っていた。まちづくりの思想の違いが垣間見えた。国内各地でスマートコミュニティの実証・導入が進み、ICTをエネルギー利用に活用することで30％程度の省エネ・省CO₂の目途も立ち、その社会的意義は大きい。一方、人や暮らしが潤う姿が見えるスマートコミュニティが実現すれば、生活者がそのまちに

したり、COP21の合意も踏まえた環境問題などに道を拓くことも望まれる。これまでのスマートコミュニティの検討はハードウェアからのアプローチが中心であったが、もうひとつの柱として、人をベースにコミュニティのあり方をさぐるアプローチが必要と考える。そこで、以下の目的に向けた検討を始めている。
・生活者の視点からコミュニティを捉え、心の豊かさ、暮らしの質(Q

② ニーズからの検討 ——生活者が 価値を感じる コミュニティとは

〈生活者のニーズから
浮かんできたこと〉
生活者はコミュニティに何を求めるのか。心のうちをよりの確に把握する

ため、Lively Collaboratorという課題把握力などの研修を受けた生活者と、Chart1のプロセスでニーズを導いた。36件のニーズが得られたが、次の点が浮かびあがった。コミュニティの希薄化が懸念されるなか、大阪のような都市部の生活者でも、個人の取り組みには限界を感じ、地域の人々と連携してQOLを高めたい意向が示されたのである。たとえば、近隣で空巣が頻発し

ても全くそのことを知らないことが多く、防犯は個人では限界があり、地域で取り組み、より安全に暮らしたい、ひとりでは負担だが地域で協力して高齢者を見守りたい、地域で子どもを見守りたいなどのニーズが示された。新設のスマートコミュニティの入居者のターゲットとなる30・40代で、京阪神在住の一般生活者200人によってニーズの重要度を評価したところ、これ

らを重要とした人は160～180人と最上位のニーズとなった。これに対し、現在のスマートコミュニティは、HEMS(※2)(家庭のエネルギー管理システム)などの個人向けサービスが中心となっている。ニーズを実現するコミュニティのつながりと、それをサポートするICTがあれば、生活者にとって新たな価値が生まれる可能性がある。

大阪のニュータウンにおける課題の実例
実例をChart2に示すが、高齢者の孤独死や、安心して子どもをひとりですて遊ばせることができないなどの切実な現状と、孤立化が懸念される中高年単身者やひとり親世帯が増えつつある変化などが見てとれ、社会課題の面からもコミュニティのつながりの大切さが浮かびあがってくる。
他のニーズとしては、安全を意識し

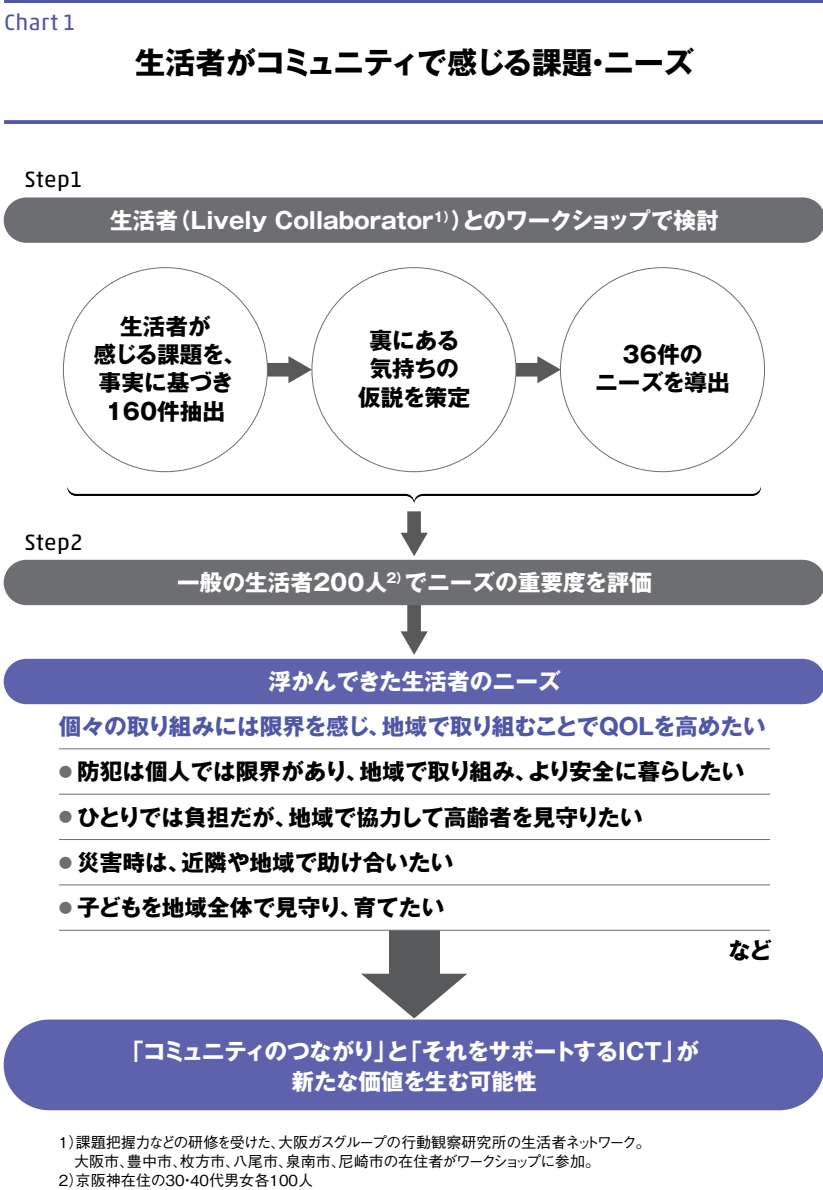


Chart 2

	課題例	実態・生の声
高齢者	●見守り ●生活支援	●単身者が増加し、地域で年間20～30件の孤独死が発生 ●足が悪く、団地の上階への回覧板の持参等が辛く、 親戚が来るときに手伝いをお願いしている など
子ども	●居場所	●親が安心して子どもを育てられない ・子どもの居場所がない ・団地は死角も多く、子どもを安心して遊ばせられない など
コミュニティ	●希薄化への対応	●顔なじみだが、3年間顔を合わせたことがない人もいる ●同じ棟では交流があるが、他はない など
中高年単身、 ひとり親世帯等	●孤立の抑止	●中高年単身者の入居も増えており、孤立しやすい ●ひとり親世帯も増えている ●新規転入者はコミュニティとの断絶が起きやすい など

出典:「大阪府住宅供給公社 団地滞在型コミュニティ支援活動報告書」

たまちづくりや、地域の生活情報の提供等の利便性に関わるものが上位となった。

〈仮説—— つながりが新たな価値を生む スマートコミュニティ〉

「コミュニティの新しい絆づくり」と「サポートするICT」により、個人の限界を超えた価値を生んでいく、つながりが新たな価値を生むスマートコミュニティが中長期的にも有効になるのでは、との仮説を立てた(Chart 3)。

将来の超高齢社会や、孤立しやすいひとり親世帯などが増加するなかでのコミュニティケア（共助）の実現、シェアする暮らし、地域の人々で連携した省エネ行動などにもつながる可能性がある。日本人の特徴として、人との結びつきや、利他に幸福感を覚えるとの報告もある。本点からもQOLにつながっていくことが期待される。

以前訪問した岐阜県の芥見東自治会連合会では、ICTは用いていないが、2400軒の全世帯で高齢者の見守りや生活支援を始めていた。個人を尊重し、大きな手助けは断るなどの理念を共有し、緩やかなつながりが実現されていた。このようなつながりと、サポートするICTが結びつけば、接点を持ちにくい都市部でも実効が期待できる。人の欲求は段階的に、社会との関わりや自己実現などに向かうとも

策なども示していきたい。

なお、人の価値観は多様である。つながりを望まない人など、それぞれの意志が尊重され、自由な参加形態や、地域の事情に応じて何を行うかなどが柔軟に検討されるべきである。

3 将来の社会像 からの課題検討

——次世代に向けた ライフスタイルを 目指して

わが国における高齢化の進展や、2050年までに80%の温室効果ガスを削減する想定、世界の人口が1990年の53億人から2050年に97億人となり、食料などの資源をいかに有効利用していくかなどの諸課題がある。技術だけでは課題解決は難しく、コミュニティに住む人にとっての新しいライフスタイルを考えていくことが望まれる。そこで、東北大学大学院環境科学研究科の古川研究室と検討を開始している。古川研究室では、将来の環境制約や社会課題からバックキャストイングし、新しいライフスタイルを検討する手法と、全国各地の90歳前後の人に戦前の暮らし振りを聴き、継承すべき心豊かに暮らす知恵を抽出する手法を構築している。両手法をもとに、2030年頃を想定して、省エネ・省資源

言われており、近年はボランティアによる社会参加が増えている。将来に向けて可能性はあるのではないだろうか。

〈仮説の実現に向けて〉

京阪神在住の生活者から、高齢者を見守りたいけれども今は声掛けできる関係がない、子どもを見守りたいけれども顔も知らないなどの実情も示された。一方、今回の検討で、公園のイベント等で触れ合いたい、システムキッチンのある施設で料理を作り合いたいなどのニーズも抽出されている。そのため、本仮説の実現には、次の視点を持つことが重要と考えている。①イベント等を通じ、互いの顔をそれとなく知る②それらを機に、料理を作り合うなどの行動を共にする人が増えていく③災害時の共助や見守りなど、必要なときに地域で連携できるようになる、というように個別のニーズを満たしつつ、将来に向けてつながりを育んでいく「コミュニティ・マネジメント」の視点である。

地域で連携した防犯、高齢者や子どもを見守りなどの個別ニーズを満たす具体的内容も生活者と検討し、約30の取り組みを創出している。高齢者の見守りの一例をChart 4に示す。本例でも、単身高齢者は見守られたい、一方30・40代女性は見守りたい人が多いなど、各取り組みの実現可能性がうかがえた。今後は、実践に向けた課題や必要な施

や少子高齢化などに役立ち、かつ心豊かにできるライフスタイルづくりの検討を始めている(Chart 5)。本結果も今後発信していきたい。

4 スマートコミュニティ を超えた展開へ

スマートコミュニティは、未来を拓く場である。本稿で述べた新しい挑戦を実現し、その成果を既存の地域にも広げていきたい。並行して、得られる知見を活かしながら、現在のコミュニティでも、順次導入を検討したい。成熟社会では、暮らしの質が求められ、本点からも重要な検討になると考えている。

最後に私事であるが、昨年マンションの理事長を務めた。コミュニティは多様な価値観や事情のある人々の生きた暮らしの集まりである。決してコミュニティの外からきれいな絵姿をおしつけるものでないということを改めて実感した。紹介した内容は、あくまでもひとつの可能性である。地域ごとに住民が何が課題で自ら何をすべきかを考えて、議論していくことが最も重要と考える。それこそが、人が中心のスマートコミュニティだと言える。

(※1)QOL: Quality of Life
(※2)HAMS: Home Energy Management System

Chart 5

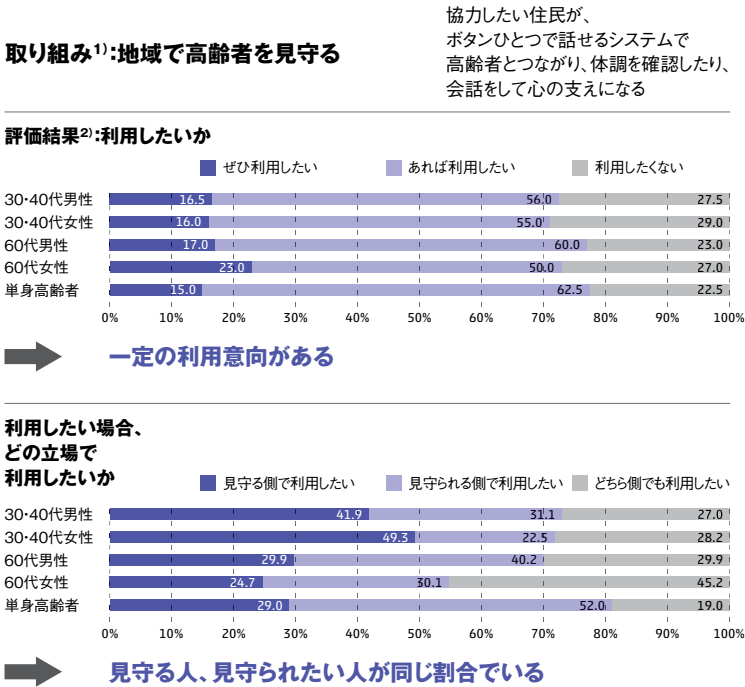
社会課題からのアプローチ 新しいライフスタイルの創出



*東北大学古川研究室が構築した手法を活用

Chart 4

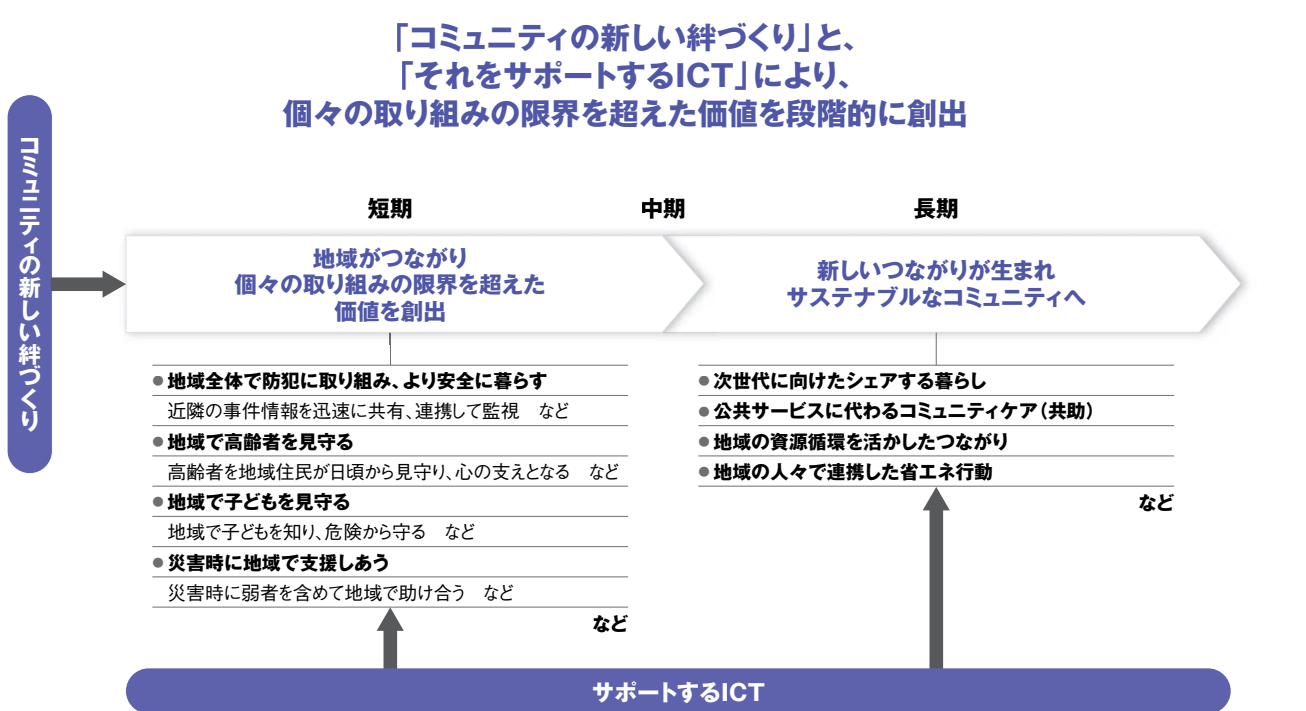
ニーズをもとに検討した 取り組みと利用意向の例



1)生活者(Lively Collaborator)とのワークショップで創出した取り組み
2)京阪神在住の30・40代、60代の男女各100人の一般生活者の評価結果(30・40代は、自分が高齢化するまでを考慮して評価)

Chart 3

仮説 つながりが新たな価値を生むスマートコミュニティ



研究レポートその2

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所 研究員

遠座 俊明

高齢者の社会参加と健康長寿の関連性について

第一線で忙しく働く世代は、自身の老後について考え、準備する余裕はなかなかない。しかし、定年退職後の人生は長く重要な問題でもある。いかに健康的に、いかに社会と関わりながら充実した老後を過ごすことができるのか――高齢者に対するさまざまな調査結果から検証する。

高齢者のためのより良い生き方を考える



てみる。

高齢者の就労・社会参加の状況と団塊世代の動向

23年前、宝塚で「高齢者問題を考える行動する会」に参加して以来、デイ・サービス事業を運営するNPOを支援し、またNPOやソーシャルビジネスなどの市民の社会参加活動をサポートする中間支援団体の経営にボランティアながら関わってきた。自らの体験も踏まえながらこれからの長寿社会につ

はじめに

いて考えていきたい。

日本の高齢者（65歳以上）比率は2005年に20%を超え先進諸国のなかで最も高い水準になったが、2015年には26%を超えた。さらに団塊ジュニアと呼ばれる人たちが65歳を超える2040年頃まで高齢者の絶対数は増加し続け、少子化と相まってその比率は2060年頃まで上昇していくことが予測されている。急速な高齢化によ

り年金や医療・介護などの高齢者関係社会保障給付費が激増しており、2013年度には75兆円を超え、わが国の国民所得の二十数%を占めるに至っている。将来世代は今後の負担の大きさに自分たちの将来への諦めさえ抱いていると言われている。

今回は、持続可能な社会づくりに対し、高齢者の健康自立について、生活が変化する際生じやすい生活不活発病と社会参加の効用という視点で概観し

時期があった。各地で団塊世代の社会参加を見込んで地域デビュープログラムなどが盛んに企画されたのだが、現在も働いている人が多いこともあり、結果として団塊世代の地域社会への参加は期待されたほど進んでいない。60代の参加者が少なく、70代80代の方々が活動の主力となり後継者不足で活動の先行きに不安を抱えている地域団体をよく目にする。内閣府「団塊の世代の意識に関する調査」（2012年）では、参加が最も多い社会活動は「趣味、スポーツ活動」で15・1%、次いで「自治体・町内会・老人倶楽部・NPO団体等の役員、事務局活動」が13・8%、「祭りなど地域行事を支援する活動」が11・5%などとなっている。反面「社会活動には参加していない」が53・4%と半数以上を占める。

しかし団塊世代が後期高齢者（75歳以上）になる2025年頃までには、団塊世代の人たちの多くは再雇用や再就職先から離職するものと考えられる。

生活不活発病（*）

高齢期に健康自立度を損なっていく要因として、最近、生活不活発病が注目されている。

生活不活発病とは、文字通り生活の不活発が原因、つまり、動かさないから動けなくなる、使わないから使えな

くなる、というものである。リハビリテーション医学の産業技術総合研究所大川弥生医師が、*“disuse syndrome”*、が廃用症候群と訳されていたものをその本来の意味が理解できるよう名称を提案したもので、介護予防重視のなかで注目され、また東日本大震災で同時多発したことからこの言葉が定着した。震災の後、それまで日課であった庭いじりや農作業ができなくなったり、散歩や運動、趣味の活動などをしなくなったり外出する機会が減った結果、南三陸町では震災前に健常だった高齢者の3割近くが震災1年7カ月後に歩くことが難しくなっていたとの報告がなされている。生活不活発病の症状はChart1にあるようにあらゆる心身機能に関わっている。実はこれは高齢期に限ったことではなく、骨折等で入院し動かない生活をしているといった間にか筋肉が落ちたり、股関節や肩関節など身体の各部を使わないことでその部位が動かしくくなるという、日常生活でも経験することである。宇宙飛行士が無重力状態での宇宙生活を4、5日続けて地上に戻った際、重力に逆らって立っていることもできなくなることはこの典型例である。

生活不活発病の特徴は、普通の病気が生物として何らかの異常が原因で生じるのに対し、その原因が「生活の変化」であるところが大きく違う。病後などでの安静のとり過ぎのほか、定年

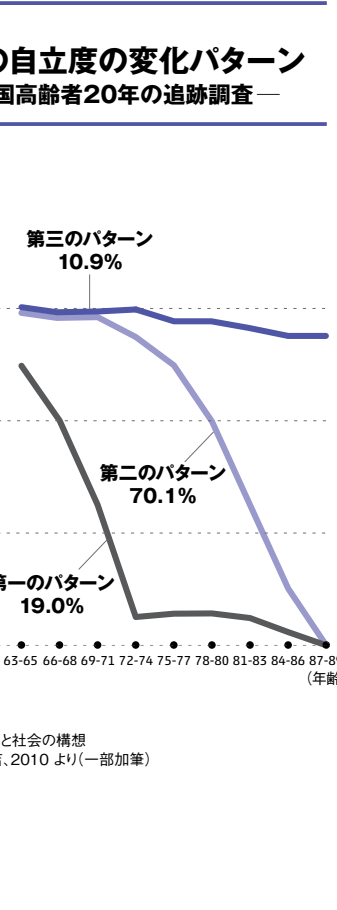
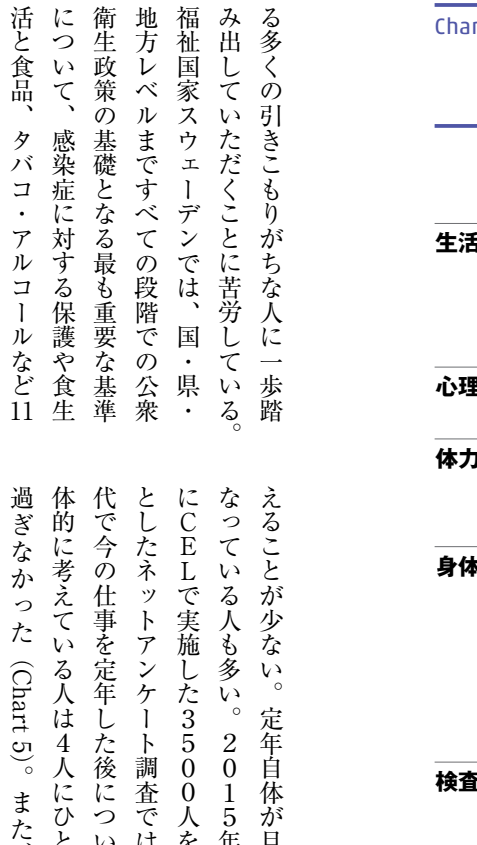
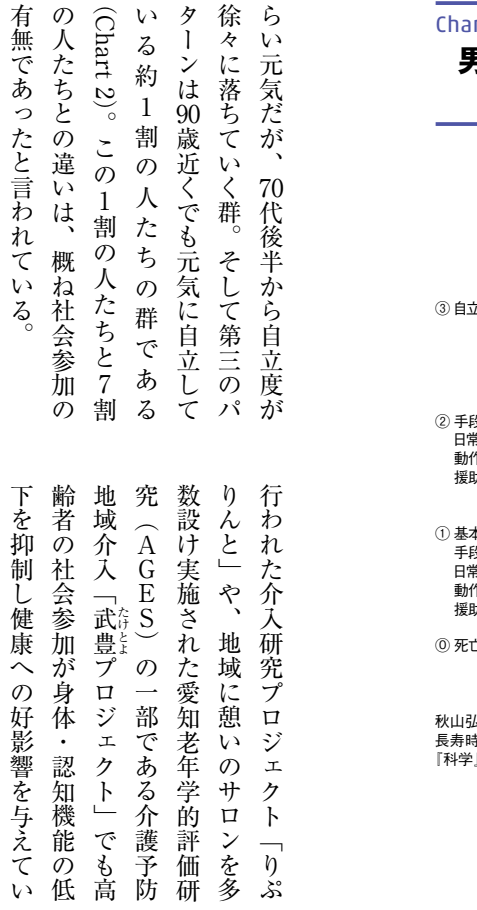
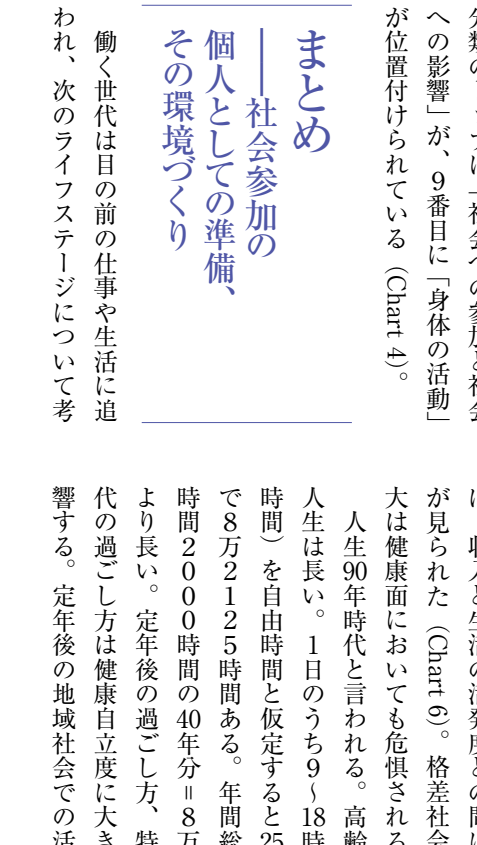
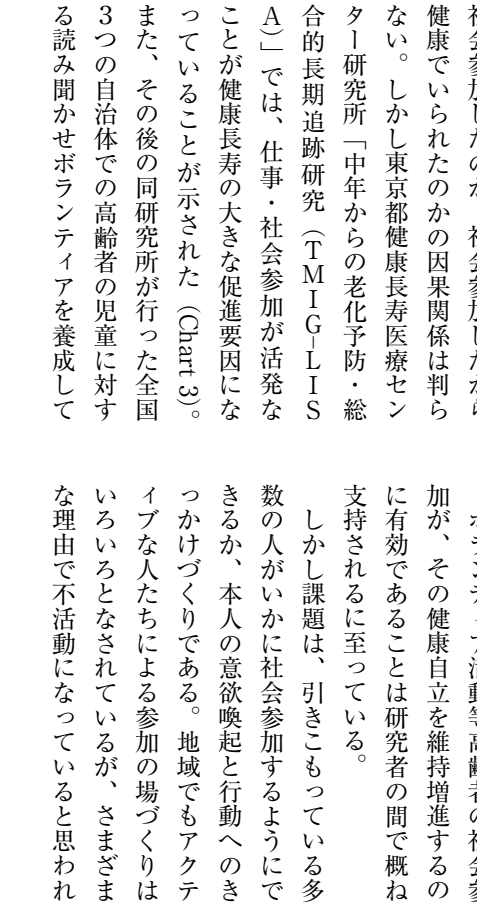
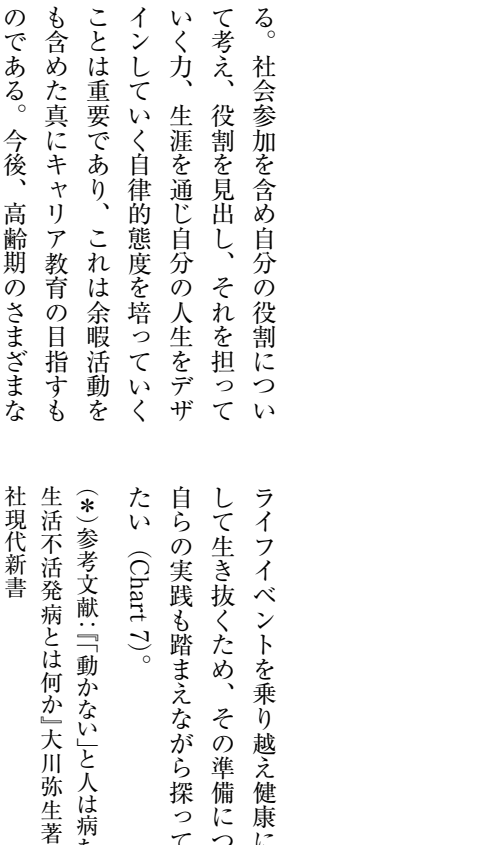
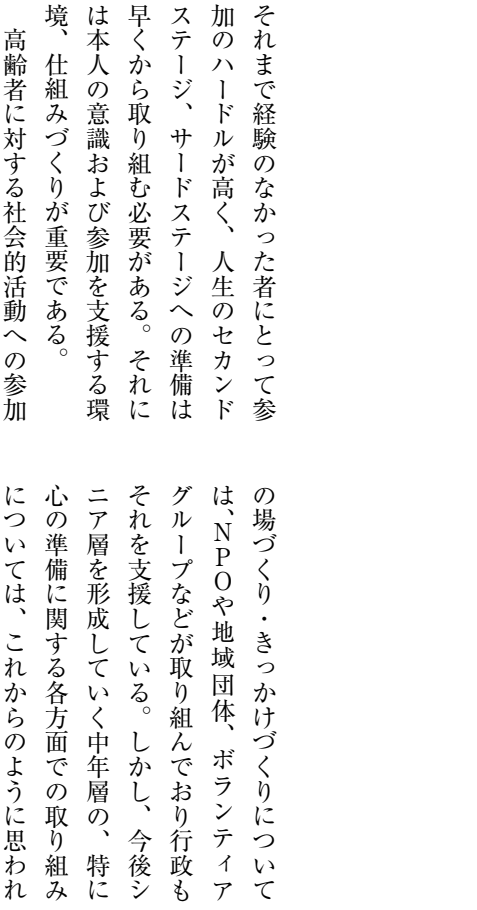
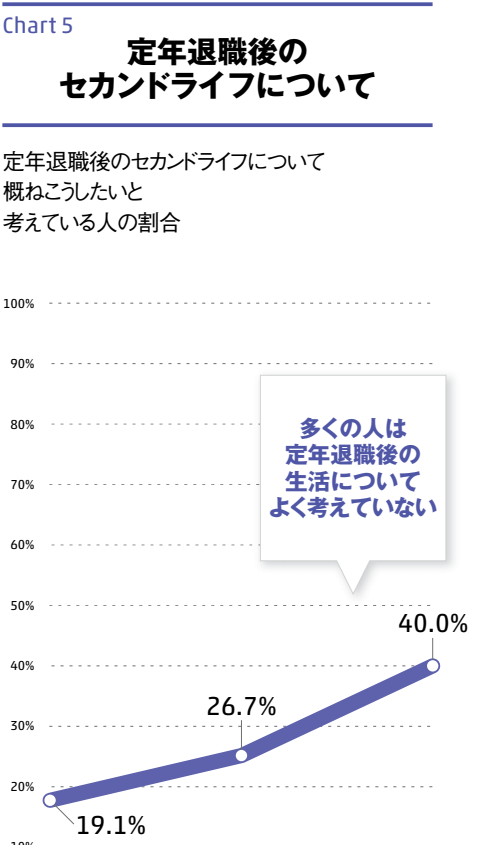
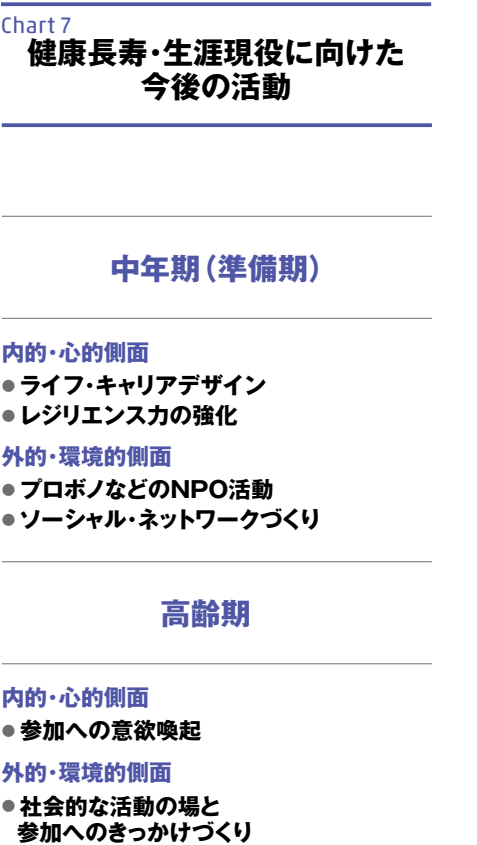
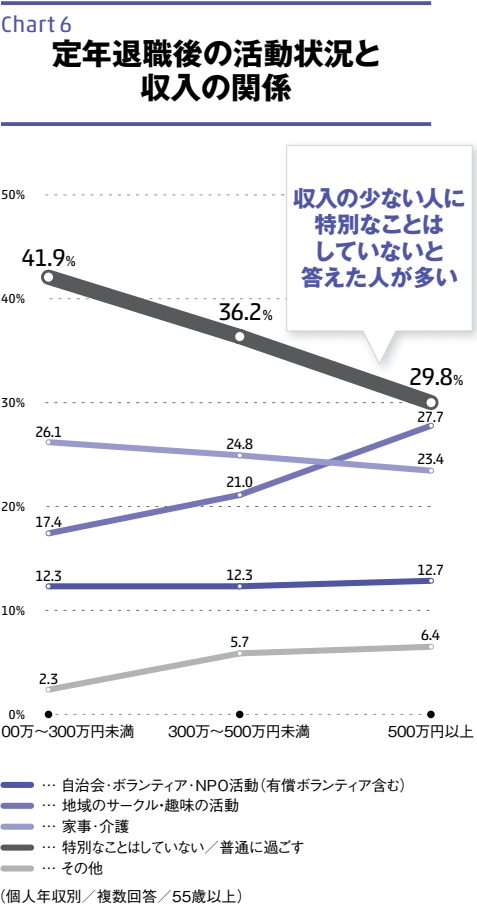
Chart1
生活不活発病（心身機能低下の例）

体の一部に起こるもの	関節拘縮
	廃用性筋萎縮・筋力低下
	廃用性骨萎縮
	皮膚萎縮（短縮）
	褥瘡
全身に影響するもの	静脈血栓症→肺塞栓症
	心肺機能低下
	起立性低血圧
	消化機能低下 a.食欲不振 b.便秘
精神や神経の働きに起こるもの	尿量の増加→血液量の減少(脱水)
	うつ状態
	知的活動低下
	周囲への無関心
	自律神経不安定
	姿勢・運動、調節機能低下

大川弥生「生活不活発病(廃用症候群) ― ICF(国際生活機能分類)の「生活機能モデル」で理解する」より

健康自立と社会参加の関係

健康自立度と社会参加に関し、興味深い調査がある。全国約6000人の60歳以上の人を無作為に抽出し3年ごとに訪問面接した結果、生活の健康自立度と年齢の関係について大きくパターン化できたというものである。男性の場合は3つのパターンに分類された。第一のパターンは生活習慣病などで70歳になるまでに急激に自立度を失っていく約2割の人たちの群。第二のパターンは約7割の人たちで、70代の半ばあたりまではひとり暮らしができるぐ



「生徒の4割が外国人になりました」と、大阪の繁華街に立地する中学校の校長から伺った。

コロッセウムやモンサンミシエルに立った時に覚えた感覚——世界中から訪ねる人々とともに人種、言葉を超えて一体化した感覚がよみがえった。この世界的な名所で経験した感覚を、東京、大阪、京都でも感じはじめるようになった。日本なのか？と感じるほど世界中の方々が歩いている。

約1260年前の平城京・東大寺。五色の幡が春風にたなびき、唐樂、高麗樂、ベトナム樂が舞われるなか、752年に廬舎那仏開眼法会が開かれた。開眼導師はインド出身の僧。聖武上皇など政府参列者に加え、唐、朝鮮、ベトナム、ペルシア、トルキスタンなどからの来賓が参列。飛鳥時代・白鳳時代に続き、唐文化にシルクロードを渡ってきた西方文化が融合し、国際色豊かな天平文化が花ひらいた。この文化を担った高度技術者における渡来人比率は5割、平安時代初期の貴族に占める割合は3割と、日本は元来グローバルで多様性ある国だったのである。

奈良時代いや日本仏像彫刻の原点であり最高傑作といわれる中宮寺の半跏思惟像は、それまでの仏像とは異なる日本的な慈悲あふれる仕種、微笑が表現され、見る人を魅了する。当初大陸から持ち込まれ、その後渡来人がつくっていた仏像から約1世紀を経て、グローバルな文化をつつみこみ、日本の自然、四季、風土、価値観と調和・融合して、独創的な「日本的な仏像」が制作された。写実的な「物質的なデザイン」に「日本的なるもの」を精神性のデザインとして混じり合わせ、渡来した仏像とは一線を画する新たな価値を生み出した。この精神性のデザインが日本文化の本質だ。

「混じり合う」という言葉が浮かんだ。「混」という文字は「水」と「まるくまとまる」でできている。さまざまなものがひとところに集まり、水に混じり合い溶け込みまとまっていく。西洋的でも東洋的でもあり、古くもあり新しくもあること、日本人が大切にしてきたにもかかわらず忘れてしまっていることを、海外の方々に発掘していただき、気づかされた。

特集／外から「日本」を見直す
平成28(2016)年11月1日発行
頒価／1,000円(送料別途)

発行
大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人
池永 寛明
企画・制作
熊走 珠美
編集人
日下部 行洋
編集
(株)平凡社

アートディレクション&デザイン
岡本一宣デザイン事務所

校正
(株)アンデバンダン
DTP制作
(有)ダイワコムズ
印刷・製本
(株)東京印書館

お問い合わせ窓口
大阪ガスビジネスクリエイト(株)
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for
Culture, Energy and Life
©2016 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複写 ※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容は、インターネットホームページでご覧になれます。

CELホームページ↓http://www.og-cel.jp/

くらしのこよみ

二十四節気
七十二候の
旬を味わう

第二回

二十四節気とは、太陽の通り道「黄道」を十五度ずつ二十四に区切り、そのひとつひとつに節気を配して四季の移り変わりを表したものです。また、二十四節気をさらに三区分し、季節の風物を言葉で表現したものが七十二候です。季節のうつろいを暮らしに取り入れるために、古くから日本で使われてきました。



「日本植物誌」
(P.F.オウシーボルト)より
「イチヨウ」

銀杏

ぎんなん

公孫樹の種子のこと。近世には公孫樹そのものを指したが、今は種子のみをいう。葉が黄色く町を彩る頃になると、熟した実が落ちて道路を覆い、強烈な臭いが漂う。これは外種皮に含まれるイチヨウ酸やビルボールによるもの。殻の中にある黄緑色の胚乳組織のみが食用部分なので、土にしばらく埋めてから掘り出して洗い、臭いの強い外種皮部分をすっかり落としてから食用にするとうい。独特の風味は和食には必須の材。殻のまま炒って酒の肴にしたり、割ってから加熱して、茶碗蒸しの具材、鍋物のあしらいに。



文／うつくしいくらしかた研究所
日本人が古くから日々の暮らしの中で実践してきたことや、暮らしの中にあつた考え方に改めて注目し、現代にも受容される「うつくしいくらしかた」を提案する。編者に『くらしのこよみ』『くらしの料理帖』がある。

二十四節気

にじむしせうせうき

立冬

りつとう

11月8日〜22日頃

暦のうえでは、まさに今が冬の始まり。北国から初雪の便りが届いたり、冬の季節風が吹き始めるのもこの時期です。「今朝の冬」という季語がありますが、これは立冬の日の朝のことです。

七十二候

しちにゅうにう

山茶始開

つばきはじめてひらく

11月8日〜12日頃

ツバキ科の花には大きく分けてツバキとサザンカの種類がありますが、冬の初めに先駆けとして咲くのは、山茶花(さざんか)です。垣根にほつりほつりと花をつけ始め、見る者に冬の訪れを予感させてくれます。

地始凍

ちはじめておこる

11月13日〜17日頃

びんと張り詰めた冷気のもと、地面の土が固く凍てつく朝もあることでしょう。冬になったことが肌で感じられる時節です。季語の世界でも「海凍る」「川凍る」「月こおる」と、豊富な「こおり」に出会うことができます。

金盞香

きんせんかきく

11月18日〜22日頃

「きんせんか」は、冬の花でも香り高いことで人気のある水仙のこと。昔中国で、花の黄色いところを黄金の杯(金盞)に、白い花弁を銀の台(銀台)にたとえて「金盞銀台」と呼び慣らわしたことに由来します。



Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside



表紙／裏表紙

英語能『ブルー・ムーン・オー
バー・メンフィス』に使われ
るエルヴィス・プレスリーの
面（表紙）と黒人の面（裏
表紙）。能楽の伝統と外か
らの文化が融合し、新しい
芸術が生み出されている。